

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1)

— きょうだい数・出生順位・性別構成による分析 —

秋山 幹男・堂野 佐俊

幼稚園や保育園(所)に元気に通ってくる幼児達に直接触れてみると、一人一人がすでに個性を有した存在であり、まったく同じような園での生活を営んでいるはずなのに、その行動や表現の仕方は大きな違いをみせることにまず気付くであろう。さらに時間をかけて子ども達との人間関係を深めていくなれば、各々の個性的な幼児ではあっても、何か共通した似よりとか差異をもったいくつかの群に分かれるのではないかという実感を得る。そこでさらに詳しく観察し、それを教師や保育者に尋ねたりしていくと、それは意外ときょうだい関係による似よりや差であることが多い。

同じ園には大体同じ家の子ども達が入園し、そして卒園していく。すると、彼の兄や姉が在園していた頃の出来事や思い出とか、一緒に通園している弟や妹との直接比較や観察などにより、これを確認することは容易である。この事実は、10年以上にわたるサンドプレイ(箱庭作り)の研究を通じても明らかになった事である。

しかし、幼児期の子どもの人格形成の主体は園であるというより、その大部分が家庭にある。この家庭には主に三つの人間関係があるといわれる。すなわち、夫婦関係、親子関係(たての関係)、きょうだい関係(ななめの関係)がそれであり、これら三つの力動的なかかわりの中で子どもの人格は基礎づけられていく。発達のみると、その後初めての対外的集団生活の場である園での生活(よこの関係)が始まるのである。だが、園での体験や触れ合いは家庭でのそれに比べれば、人格形成に占める割合はまだはるかに及ばない。とはいえ、こういう時期の一人一人の園児の性格的特徴は、園の教師や保育者でも他の子どもとの比較により、ある程度客観的に把握されるし、研究者であるわれわれも実験的にそうしている。しかし、われわれは園児の親ではない。発達臨床を志す者にとって、園での保育者と子の関わりとあわせて知りたい事は、親の子への関わり方である。家庭における両親のわが子に対する接し方、受けとめ方についての認識はどのようなものなのかという事なのである。そこで今回は、幼稚園教師の協力を得て作成された園での子どもをみる為の性格項目を用いて、両親の反応を調べてみることにした。

本研究は、両親が園に通うようになったわが子(幼児)をどのような態度で養育し、また、どのように彼らの性格を認知しているかについて調べることを目的とする。比較は、子ども側の要因であるきょうだい構成、つまり、きょうだいの数・出生順位・性別構成の中に子を組み替えながら実施してみることにした。これは、自己形成と家族関係という大きなテーマにそった研究の一つである。

方 法

対象者 幼稚園・保育園(所)に在園中の3～6歳の幼児をもつ両親を対象にして実施された。各園に依頼し、1,302部の調査用紙を回収したが、本研究に用いた数は母親が1,161人、父

親では993人であった。

実施場所 島根県と広島県で実施。島根県は浜田市、広島県は三次市・山県郡大朝町・広島市と佐伯郡大柿町であった。中国山地をはさみ、日本海側と瀬戸内海側の南北の町で調査したことになる。

調査実施依頼園と回収数

〔浜田市〕 H幼稚園（161部）U幼稚園（109部）S幼稚園（76部）S保育園（28部）M保育園（60部）

〔山県郡大朝町〕 S保育所（60部）

〔三次市〕 Mi幼稚園（338部）Mu保育所（31部）K保育所（20部）W保育所（30部）

〔広島市〕 M幼稚園（147部）M保育園（91部）

〔佐伯郡大柿町〕 O保育所（99部）F保育所（52部）

以上、幼稚園の回収数は831部、保育園（所）の回収数は471部となった。

実施方法 まず依頼書を発送し、園長の許可を受けた。その後、直接お願い状と調査用紙を持参した。回収の連絡がはいた時点で再度訪問し受け取った。

実施期日

浜田市と大朝町：1980年（昭和55年）10月29日依頼，12月3日受取り。

広島市と大柿町：1980年（昭和55年）10月28日依頼，11月18～19日受取り。

三次市：1980年（昭和55年）11月17日依頼，（保育所）11月25日受取り。（Mi幼稚園）12月19日受取り。

実施内容 調査用紙は無記名式で，[I]子どもと家族について [II] 養育態度について [III] 子どもの性格についての三部より構成されている。この調査用紙を持って帰った子どもについて回答してもらう。記入の仕方は，同じ用紙に父は黒鉛筆で，母は赤鉛筆で [II]・[III] に○印をつけてもらった。

[I] 子どもと家族について ①子どもの生年月日，②性別，④両親の年齢，④同居家族（人数と年齢）を記入してもらう。

[II] 養育態度について 質問内容については，広島県中央児童相談所が3歳児健診の折に用いている簡易親子関係テストをベースにした。さらに，田研式の親子関係診断テスト（両親用）と田研・両親態度診断検査を参考にして，質問項目を倍に増やし作成されたものである。なお，表現の仕方については，児童・生徒用の文章を幼児用にかえたり，現場の保母の意見をもとに「片親が」という表現を「片方の親が」に改めた。結果的に，保護・服従・拒否・支配・矛盾不一致という5つの養育態度は各々10問づつとなり，計50問の質問が出来上がった。回答は，はい（2点）時々（1点）いいえ（0点）の三択一としたため各態度の最高得点は20点となる（付表1参照）。

保護は干渉型と不安型，服従は溺愛型と盲従型，拒否は消極的拒否型と積極的拒否型，支配は厳格型と期待型より構成されている。なお，矛盾不一致は片方の親の内部の矛盾と，両親間の不一致を組み合わせで作成されたものであるため，今回の態度についての分析からは除外することにした。

[III] 子どもの性格について 50個の性格を表わす言葉をあげ，一つ一つの性格特性項目について5段階評定でチェックをしてもらった。この性格項目の抽出は，次のようにして行われた。秋山は1973年（昭和48年）より附属幼稚園の園児を対象としてサンドプレイ（箱庭作り）を実施しているが，作製後にその幼児について園での様子を担任の教師から聞いている。性格項目抽出の為の作業は，まず，昭和48年度の年長そら組の園児（男児23名，女児16名）につい

て二人の担当教師より112個の性格を表わす言葉を得たことに始まる。次に、その中から2人以上の子どもに用いられていたものを54個取り出した。これをもとにして、昭和50年3月、当時附属幼稚園に勤務していた7名の教師を調査対象にして、園児の性格をみるために適切だと思われる言葉(項目)を30個選んでもらった。その結果選択されなかった4項目を除いて50項目としたのである。さらに、昭和55年2月にはこれを5段階評定の質問紙に改訂し、以来本学の園児に対する心理検査用として使用してきているものである。

50の項目の内訳は次のようなものである。

1 明るい	18 思いやりのある	35 たくましい
2 やさしい	19 幼ない	36 忘れやすい
3 集中力がある	20 はっきりしている	37 自己中心的な
4 落ち着いた	21 傷つきやすい	38 創造的な
5 涙もろい	22 自意識過剰な	39 乱暴な
6 自信のある	23 積極的な	40 おとなしい
7 意志が強い	24 器用な	41 活発な
8 確実(正確)な	25 自己主張をする	42 のびのびした
9 目だたない	26 型にはまった	43 とろい
10 意欲的な	27 しっかりした	44 独創的な
11 表情が豊かな	28 無邪気な	45 がさつな
12 いじの悪い	29 恥ずかしがり	46 依頼心が強い
13 好かれる	30 しまりのない	47 おっとりしている
14 おどおどした	31 自主的な	48 マイペース
15 素直な	32 完成された	49 甘える
16 頼もしい	33 要領がいい	50 リーダー的
17 注意力のある	34 ふざけた	

なお、本研究の分析に当っては、非常にそう思う・そう思うを「はい」、そう思わない・まったくそう思わないを「いいえ」とし、統計的な処理(X^2 検定)はすべてこの「はい? いいえ」の3段階評定に置きかえたものでなされた。

結果と考察

本研究のもとになるデータは、調査用紙を持ち帰った在園中のわが子に対する両親の養育態度と性格認知の回答である。このデータを今回は子どもの側の要因であるきょうだい数・出生順位・性別構成といった三つのきょうだい構成の中に分析のたびに組み替えながら位置づけたものである。各比較ごとに平均得点(養育態度)と出現数(性格認知)を算出し、これをもとに統計的な有意差検定(t 検定と X^2 検定)を施した。ここで得られた差異の面に研究の焦点をあて、母親と父親の子どもへの関わり方を、男児と女児に分けた比較の下で検討してみたのが今回の試みなのである。

これは、「親のある特定の強い養育態度が子どもの性格をこのように決定する」といった様な研究をめざすものではない。あくまでも家庭において親は幼児期の子どもにどのような態度で接しているのか、またその関わり(育児)の中で子どもをどのように受け止めているのかという、親子関係における親の側の要因を探ってみようとするものである。子の側の三つの要因は、比較研究の為に相対的に取り出されたものにすぎないという事を十分留意しておいてほしい。

子どもの側の要因であるきょうだい数により、調査で得た子どもの数の出現率を父母別にみたのが表1である。

表1. きょうだいの数と出現率 (単位%)

	一人っ子		二人きょうだい		三人きょうだい		四人以上のきょうだい	
	M	F	M	F	M	F	M	F
母親 (1,161人)	12.4		59.0		25.7		2.9	
	6.7	5.7	32.0	27.1	13.9	11.8	0.8	2.2
父親 (993人)	12.9		60.2		24.6		2.3	
	7.7	5.2	33.0	27.2	13.3	11.3	0.6	1.7

M=男児、F=女児

表2. 幼児の年令分布(単位%)

Age	N	男児	女児	計
		629	548	1177
2歳児	0.6	0.0	0.3	
3歳児	6.5	7.3	6.9	
4歳児	29.9	27.0	28.5	
5歳児	37.2	36.3	36.8	
6歳児	25.8	29.4	27.4	

表3. 家族構成 (単位%)

	N	男児	女児	計
		626	548	1174
核家族	65.7	61.1	63.5	
三世同居家族	祖父母	18.5	20.3	19.3
	祖母	14.2	15.7	14.9
	祖父	1.6	2.9	2.2

幼児達は、昭和53年6月(2歳5カ月)生れから昭和49年4月(6歳7カ月)生れの範囲の子どもであるが、4~6歳児が9割以上を占めている(表2)。表3の家族構成をみると、核家族と三世同居家族の比率はほぼ6:4である。調査地域の中で特に核家族化が進んでいたのは広島市であった(82%)。なお、母子家庭は22世帯、父子家庭が8世帯みられた。

両親の年齢をみると、母親は30~34歳の人が58.0%、25~29歳の人24.0%、ついで35~39歳の人14.0%である。父親の方は、30~34歳の人が45.2%と一番多く、35~39歳が33.4%、40~44歳10.3%、25~29歳の人8.3%と続いていた。三世同居家族における祖母の年齢は、50代が41.9%、60代が40.7%、70代が15.3%なのに対し、祖父の場合は、60代が50.0%、あとは70代と50代が各々24.6%と23.4%を占めた。なお、この分析ははっきりと年齢が明記されていたデータに基づくものである。

結果はすべて統計的な処理をもちいた。標本は2つ(独立)とし、二群間の差異の検討には $P<.05$ の有意水準を使用した。養育態度については、子どもの側の要因別に平均得点と標準偏差(SD)を算出し、2つの平均得点の差の検定(t検定)をおこない検討する。これは学会発表よりもさらに詳細におこなわれた¹⁾²⁾³⁾⁴⁾⁸⁾。

わが子の性格認知については、上位30位までの出現項目(%変換)をもとにした7区分表示法²⁾³⁾⁸⁾や、出現率50%以上の項目(論文集では45%以上)についての分析報告⁴⁾を学会でおこなってきた。しかし、今一つ満足がいかなかった。その理由を例を上げて説明してみよう。親からみてAという性格項目は上記の条件を満たしており、第一子より第二子によく当てはまる特徴であるとする。この調査方法による回答からはnon Aという出現も当然得られるわ

けである。こちらの方は、0%に近い出現のものから基準すれすれに近い出現をみせるけれども条件に達しないので除外されてしまうものまで幅広く存在する可能性が残るのである。この問題は、学会発表のような基準を用いたのでは検討の対象にされえないのである。そこで本研究では今一度調査研究の原点に戻り、Aも non Aもすべて統計的処理の対象とし、各比較群間ごとに X^2 検定を実施したのである(2つの独立した標本として)。つまり、「はい」対「?+いいえ」と「いいえ」対「はい+?」について各々%変換前のナマの集計人数(度数)でもって計算をし、 $P < .05$ で有意差をみせた項目をすべて抽出した。さらにこの中から、2群のどちらも25%未満の出現率であったのに有意差をみせた項目は除いた。その結果得られた項目は、 $P < .05$ で有意差をみせ、しかもいずれか一方の群が必ず25%以上の出現をみせるという二つの条件を満たした。今回の分析研究では、この差異項目が比較検討にもちいられた。

ついで、きょうだい構成の中でこれらの差異項目を比較するに当っては、50%以上の出現をみせた項目とそれ未満のものとを区分けする。この区分けは、便宜的に50%以上の方をO側(Over-Side)、それ未満をU側(Under-Side)と命名した。こうすると、2群間における差異項目の比較検討は、O-O区分、O-U区分とU-U区分という三つの区分の中で行われることが可能になる。なお、差異項目は有意に出現の多かった方の群の該当する区分の中に記し、その群の性格的特徴を示すものとした。O-O区分とは、二群ともに項目が50%を越えていてしかも有意な差をみせたものを記す区分である。O-U区分とは、出現の多い方は50%を越えているが、他方の群では50%以下の出現をみせた項目が入るもの。そして、U-U区分とは、片一方の出現が49.9~25.0%の中にあり、共に低い出現ではあっても有意差をみせた項目が入る区分なのである。

本研究では、O-O区分とO-U区分を顕在的性格認知群、U-U区分を潜在的性格認知群と命名した。きょうだい構成による2群間の比較に当っては、男児と女児とを常に対として表示または図示することにした。なお、母親と父親がみせた差異項目は、共通(共)、母親のみ(母)と父親のみ(父)の三つに分けて、各区分ごとにまとめられている。有意差をみせた項目の出現率(%)を付記することは、図をみる際に複雑化し煩瑣になる為、一括して付表2~5-2に記した。

各群間における養育態度と性格認知の関係については、男児と女児との比較などを詳しく検討する紙面もないので、今回は併記し、軽くふれる程度に留めたい。

分析1: 調査全体からみた男女児についての比較

われわれは、「全体の中に個を生かす」という研究方針もっている。そこで、まず調査全体からみた幼児期の男児と女児に対する両親の養育態度と、50の性格特性項目の出現についてみていくことにする。

表4. 調査全体からみた養育態度の平均得点とSD

男 児					女 児				
					(単位 点)				
At.	保護	服従	拒否	支配	At.	保護	服従	拒否	支配
母親 622	10.0 2.9	4.4 2.7	7.1 2.8	6.3 3.1	母親 443	9.9 3.1	4.1 2.6	7.0 2.9	6.9 3.4
父親 543	8.1 3.4	4.7 3.0	6.5 3.1	6.2 3.3	父親 454	8.6 3.5	5.0 3.1	6.3 2.9	6.6 3.4

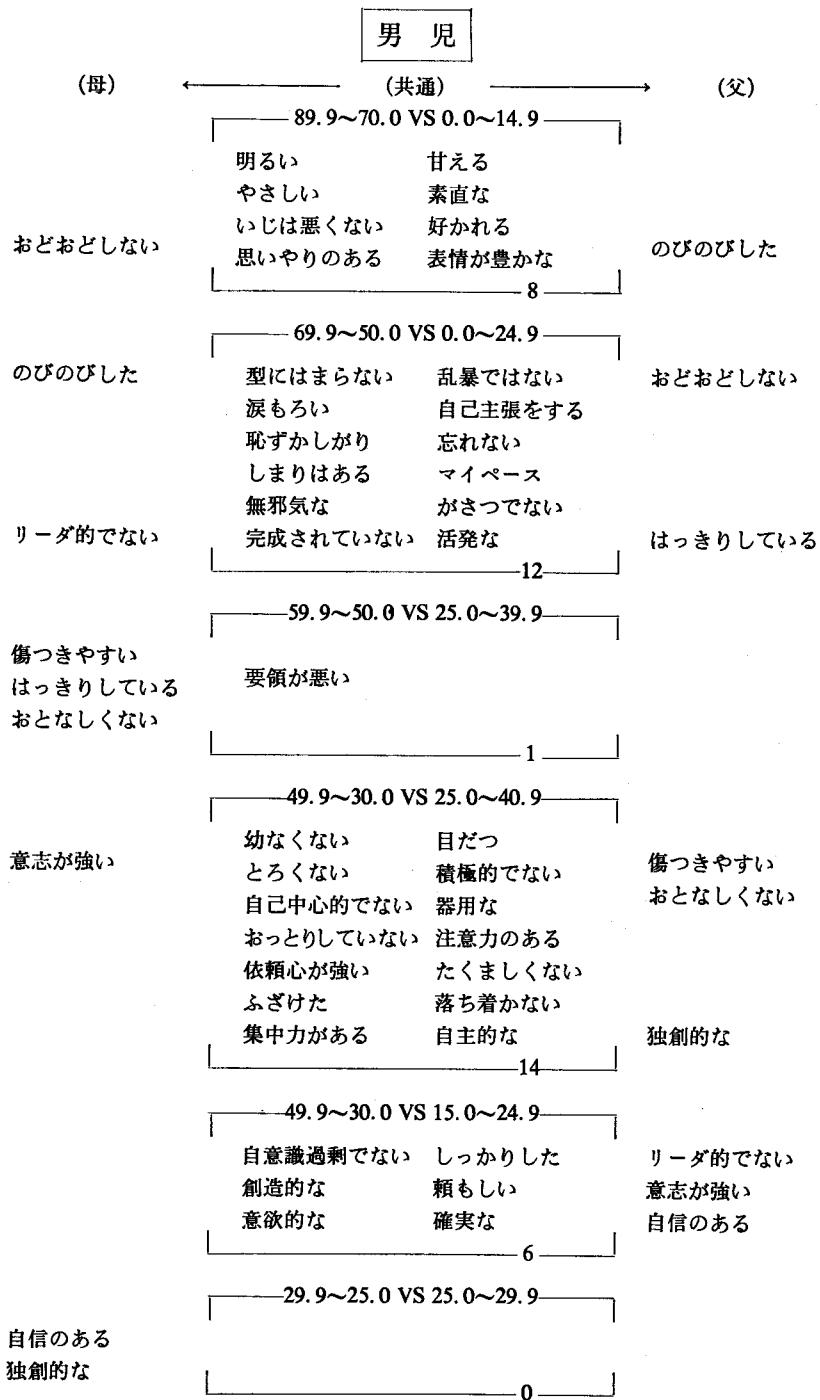


図1-1. (調査全体) はいといいいえの出現率でみた項目の区分分け —男児について—

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

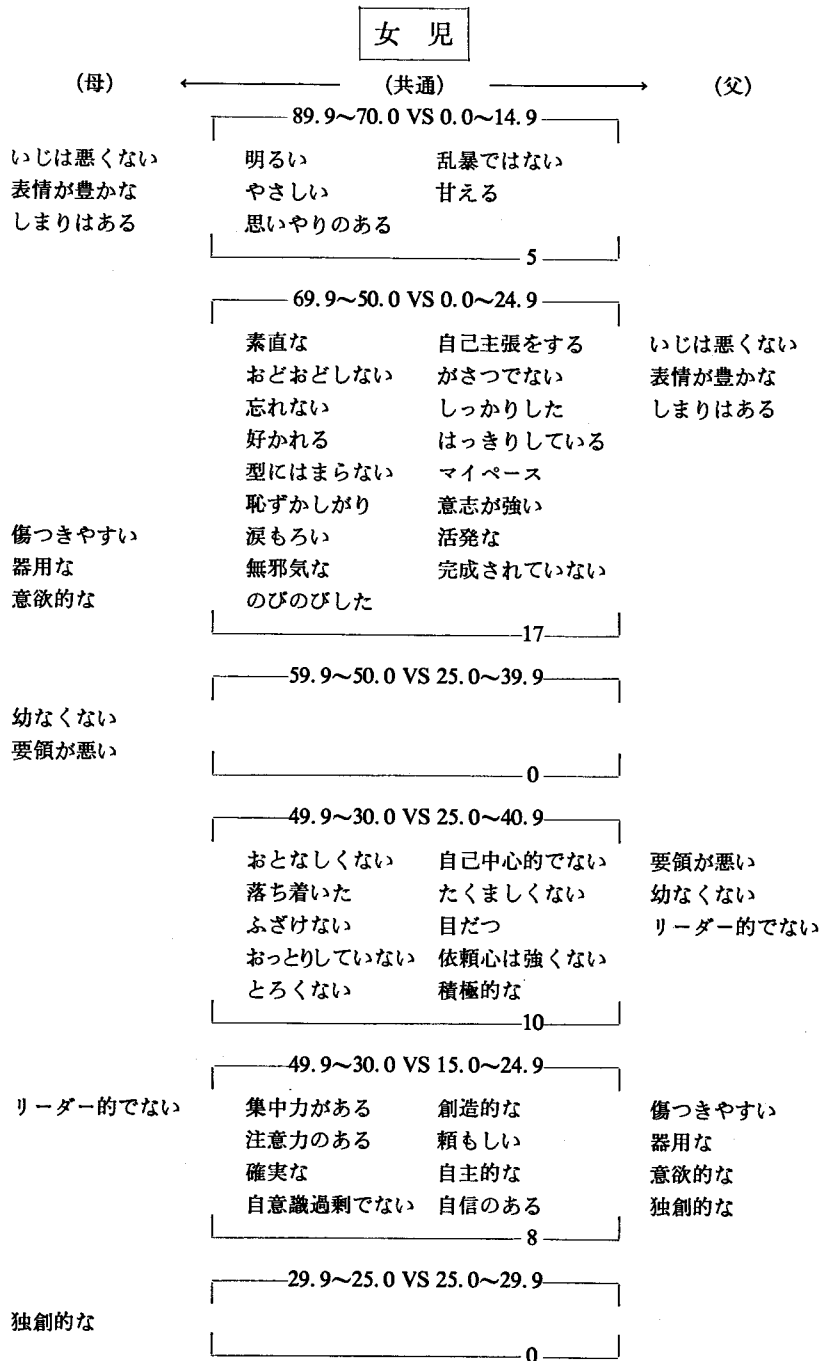


図1-2. (調査全体) はいといいえの出現率でみた項目の区分分け 一女児について

1の1 養育態度

母親は男児より女児の方に支配的であり、父親は保護的であるといえよう。両親間の比較からは、男女児共に母親の方が父親よりも保護・拒否の平均得点が高く、一方父親は、女児についてのみ母親より服従で高く甘いということがわかった (t 検定, $P < .05$ —表 4 より)。

1の2 性格認知

性格項目について「はい」と「いいえ」の出現率からまとめたものが図 1 である。表記の仕方を「89.9~70.0 vs 0.0~14.9 の場合」で説明してみよう。わが子が甘えるという評定 (判断) にはいと回答した母親は75.8%, 逆にいいえと評定した者は12.1%であった。そこで甘えるという項目は、はいが89.9~70.0に入り、いいえが0.0~14.9%の中に入ったということなのである。各区分内の項目の表記については、右よりも左、下よりも上にあがるほどその出現率が高くなるように位置づけてある。なお、父母共に出現率傾向が同じ区分に入る場合は (共通) に、出現率が違う場合にはそれぞれの該当する区分の左横 (母), 右横 (父) に項目を表示してある。

一冊の調査用紙で両親の回答を得る方式のためか、この分析からみると、父母間の項目選択率はあまり大きな開きをみせないように思われる。しかし、統計的にみると、男女児間には図

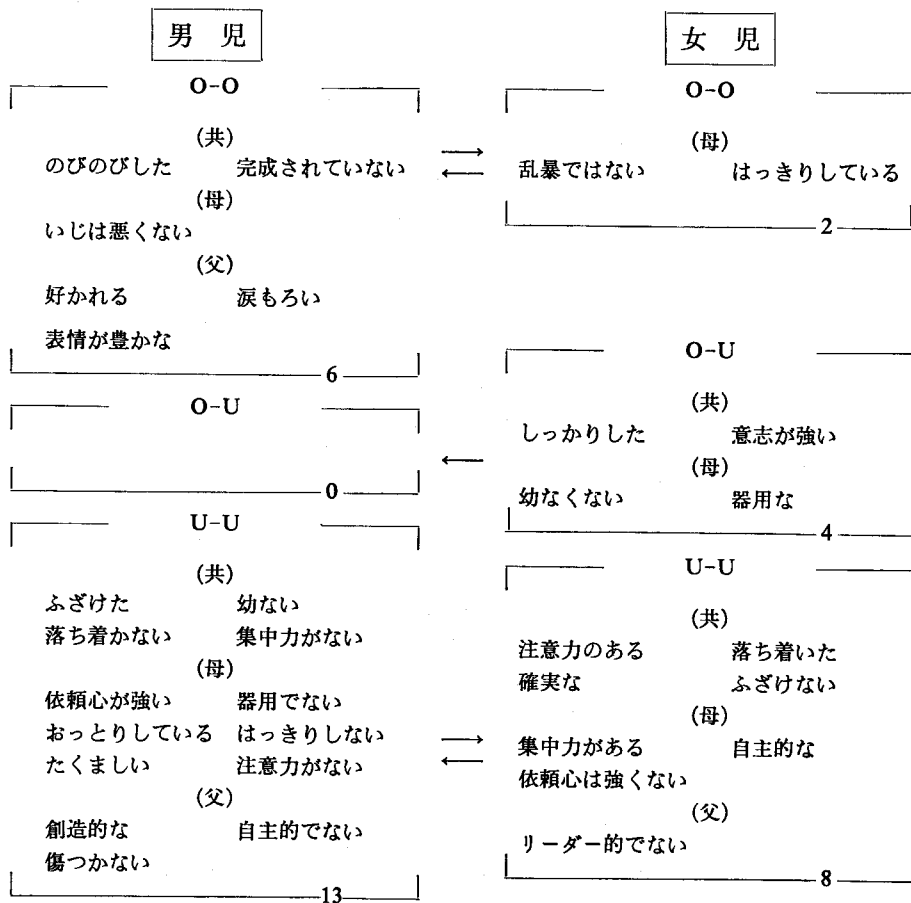


図2. (調査全体) 男女児間で現われた差異項目

2に示すような性格項目で有意な差をみせた(出現率については付表2参照のこと)。

U-U区分という潜在的な性格認知群に入る項目に特徴がみられる。出現率は低いが、男児にはマイナス的な認知が女児よりも多く、特に母親の場合にその傾向が強いといえる。これらは、顕在的性格認知群に入る項目のように多選択の出現ではないが、目だたないところでこのような認知上の差異をみせていることが注目に値する。この認知群にある項目は、これまでの学会発表のような分析法では切り捨てられてしまった部分なのである。

1の3 幼稚園教師による性格項目の選択度

これは1975年3月に調査されたものである。当時附属幼稚園には7名の教師がおり、この先生方を対象にして園児の性格をみるために適切だと思われる項目を、54項目の中から30個づつ選んでもらった。その集計結果が表5である。

表5. 幼稚園教師による項目の選択度

7人全員選択	5人選択	确实(正確)な 要領がいい	自主的な 2人選択
明るい	目だたない	ふざけた	おどおどした
やさしい	好かれる	がさつな	無邪気な
集中力がある	注意力のある	依頼心が強い	たくましい
表情が豊かな	自意識過剰な	マイペース	忘れやすい
思いやりのある	創造的な	甘える	自己中心的な
幼ない	おとなしい	3人選択	とろい
6人選択	活発な	涙もろい	1人のみ
意欲的な	のびのびした	自信のある	頼もしい
はっきりしている	おっとりしている	いじの悪い	器用な
積極的な	リーダー的	素直な	しまりのない
自己主張をする	4人選択	傷つきやすい	完成された
恥ずかしがり	落ち着いた	型にはまった	独創的な
乱暴な	意志が強い	しっかりした	

図1にみられる両親の選択傾向と、この教師のそれとを比較してみると、家庭と園での幼児をみるおとなの判断基準に少し違いのあることがわかる。この基準のわずかなずれが、園生活という家庭とは一味ちがった人間関係を体験させることになり、子どもの人格への微妙な味づけになっていくのであろう。しかし、これは今後の研究課題である。

分析2: きょうだい数からみた比較

2の1 養育態度

男児については、母親が一人っ子に対し保護的(三人きょうだいと比べて)である以外は、態度間で有意な差をみせるものはない。しかし、女児に対しては、きょうだいの人数によってかなり親は態度に違いをみせることがわかった。特に母親の態度の差が著しい。母親の保護と服従の態度は、きょうだい数が増えるに従って平均得点が低くなり、わが子に対するかまひ過ぎの傾向は少なくなっていく。拒否の態度は二人きょうだいで強く、一人っ子の場合には逆に弱いといえる。支配については、三人きょうだいで弱くなっている。言え換えれば、一人っ子の母親はかまひ過ぎの度合が高く、二人きょうだいの母親はやや拒否的、三人きょうだいの母は

表6. きょうだい数からみた養育態度の平均得点とSD

男 児					女 児				
母親					母親 (単位 点)				
At.	保護	服従	拒否	支配	At.	保護	服従	拒否	支配
一人っ子 78	10.7 2.9	4.7 2.4	7.1 2.7	6.2 3.1	一人っ子 66	10.8 3.2	5.3 2.9	6.0 3.2	7.1 3.5
二人きょうだい 374	10.0 3.0	4.4 2.8	7.2 2.9	6.3 3.1	二人きょうだい 315	10.1 3.1	4.1 2.6	7.4 2.9	7.2 3.3
三人きょうだい 161	9.8 2.6	4.5 2.7	6.8 2.6	6.4 3.1	三人きょうだい 137	9.0 2.8	3.5 2.4	6.6 2.7	6.4 3.3
父親					父親				
一人っ子 76	8.6 3.0	5.3 3.3	6.0 3.0	6.1 3.4	一人っ子 54	8.9 3.5	5.9 3.1	5.8 3.0	6.7 3.4
二人きょうだい 330	8.2 3.4	4.7 3.0	6.6 3.2	6.1 3.3	二人きょうだい 272	8.7 3.5	5.1 3.1	6.4 2.8	6.8 3.3
三人きょうだい 131	7.7 3.3	4.5 2.9	6.6 2.9	6.5 3.2	三人きょうだい 111	8.2 3.6	4.6 3.1	6.2 3.0	6.0 3.6

どの態度も一人っ子や二人っ子の親に比べれば、甘くもなく支配的でもないといえよう。一方、父親の方は、一人っ子の女兒に服従的（三人きょうだいと比べて）で、三人きょうだいの子には支配的でなかった（二人きょうだいと比べ）。

次に男児と女児の比較をしてみよう。一人っ子では、母親は男児に拒否的である。二人きょうだいの場合は、父母とも女児の方により支配的であるといえる。また三人きょうだいについては、母親は男児の方により保護・服従的であり、甘いといえる（表6をもとにしたt検定 $P < .05$ による）。

2の2 性格認知

子どもの側の要因であるきょうだいの数からみた比較の組み合わせは、一人っ子対二人きょうだい、一人っ子対三人きょうだいと二人きょうだい対三人きょうだいの3種類である。

二人きょうだいに比べて一人っ子の場合は、男女児共に静的でどちらかという消極的な認知を親から多くされているといえよう（顕在的ならびに潜在的 성격認知群のいずれにおいても）。特に一人っ子の女兒に対する母親の潜在的 성격認知群に入った項目について、この傾向が強い（図3-1）。

三人きょうだいと一人っ子の場合にもよく似た傾向をみせるが、この比較ではその事以上に三人きょうだいの子の特徴として上ってくる差異項目の少なさが目につく（図3-2）。

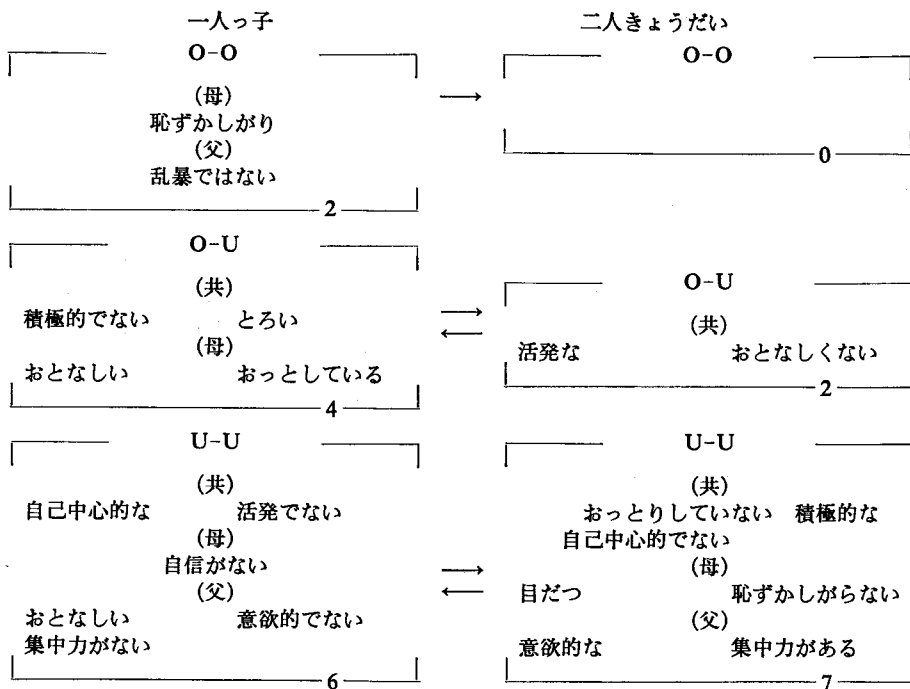
二人きょうだいと三人きょうだいの子どもについての比較となると、抽出される差異項目の数はさらに少なくなってしまった。子どもが2人か3人かという場合では類似項目の方が多くて、差異項目としてあがるものがほとんどなくなるということの意味しているのだろうか（図4）。

次に両親間を比べてみよう。一人っ子の男児については、両親がみせた差異項目数はほぼ同じ位の出現であったけれど、一人っ子の女兒に対しては、母親の方が多くなっていた。この傾向は二人きょうだいについてもいえそうである（差異項目の出現率については付表3-1、3-2参照）。

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (I) (秋山・堂野)

一人っ子対二人きょうだい

男児



女児

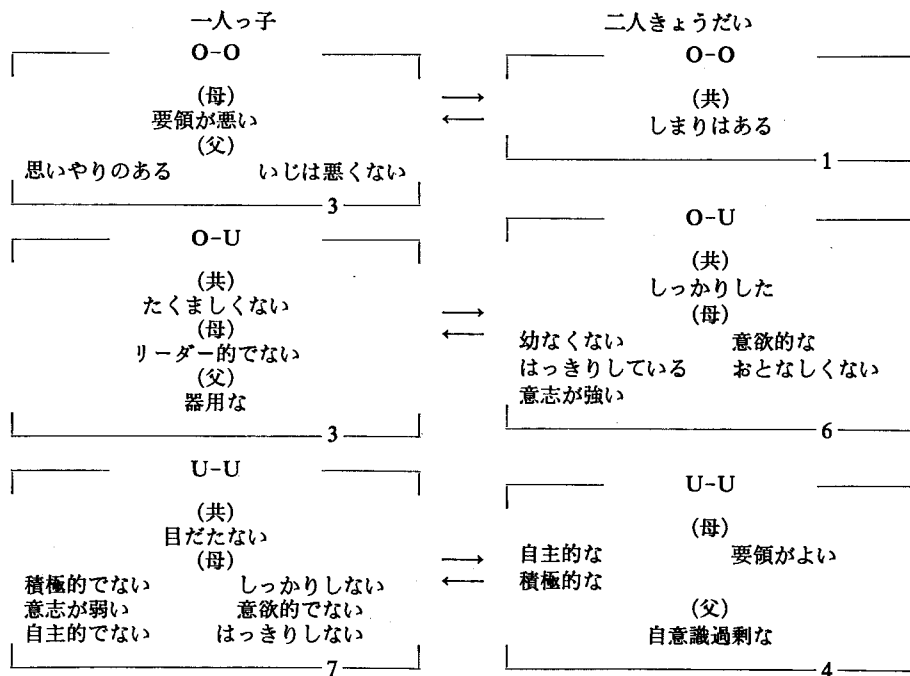
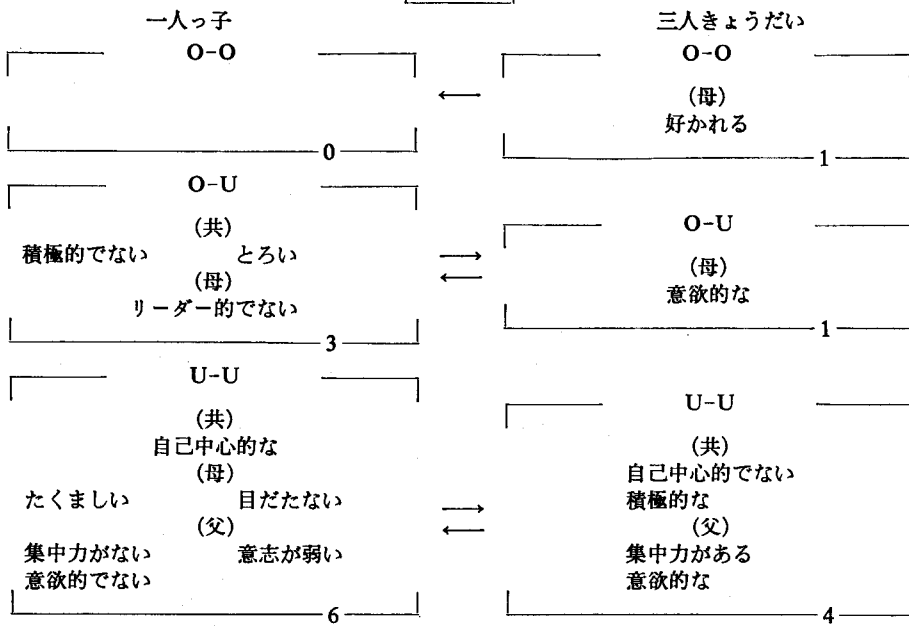


図3-1. きょうだい数からみた2群間の差異項目 (一人っ子と二人きょうだいの比較)

一人っ子対三人きょうだい

男児



女兒

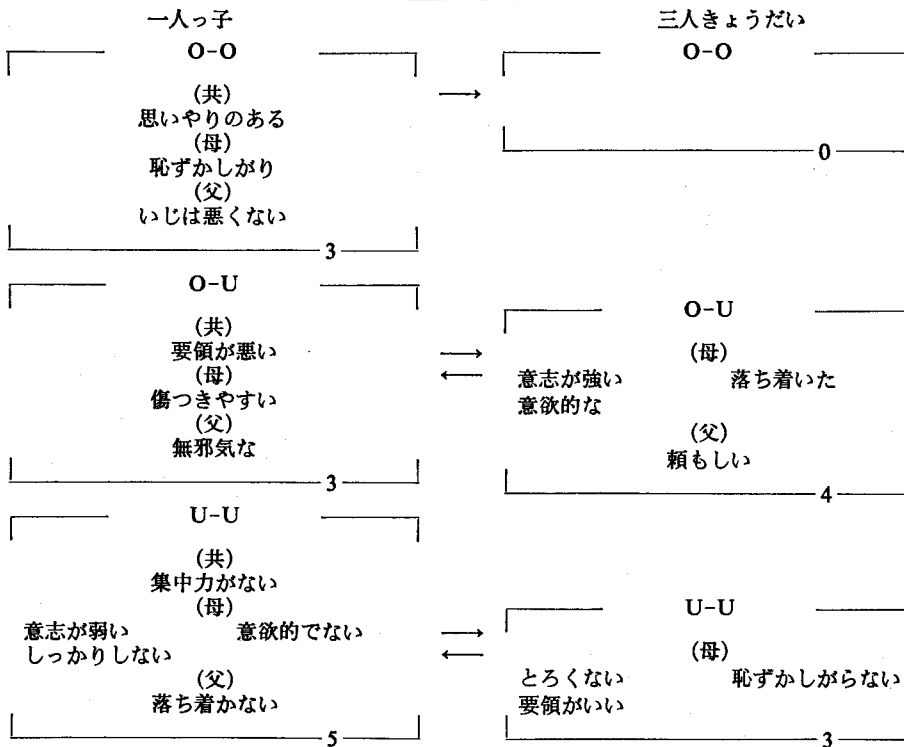


図3-2. きょうだい数からみた2群間の差異項目 (一人っ子と三人きょうだいの比較)

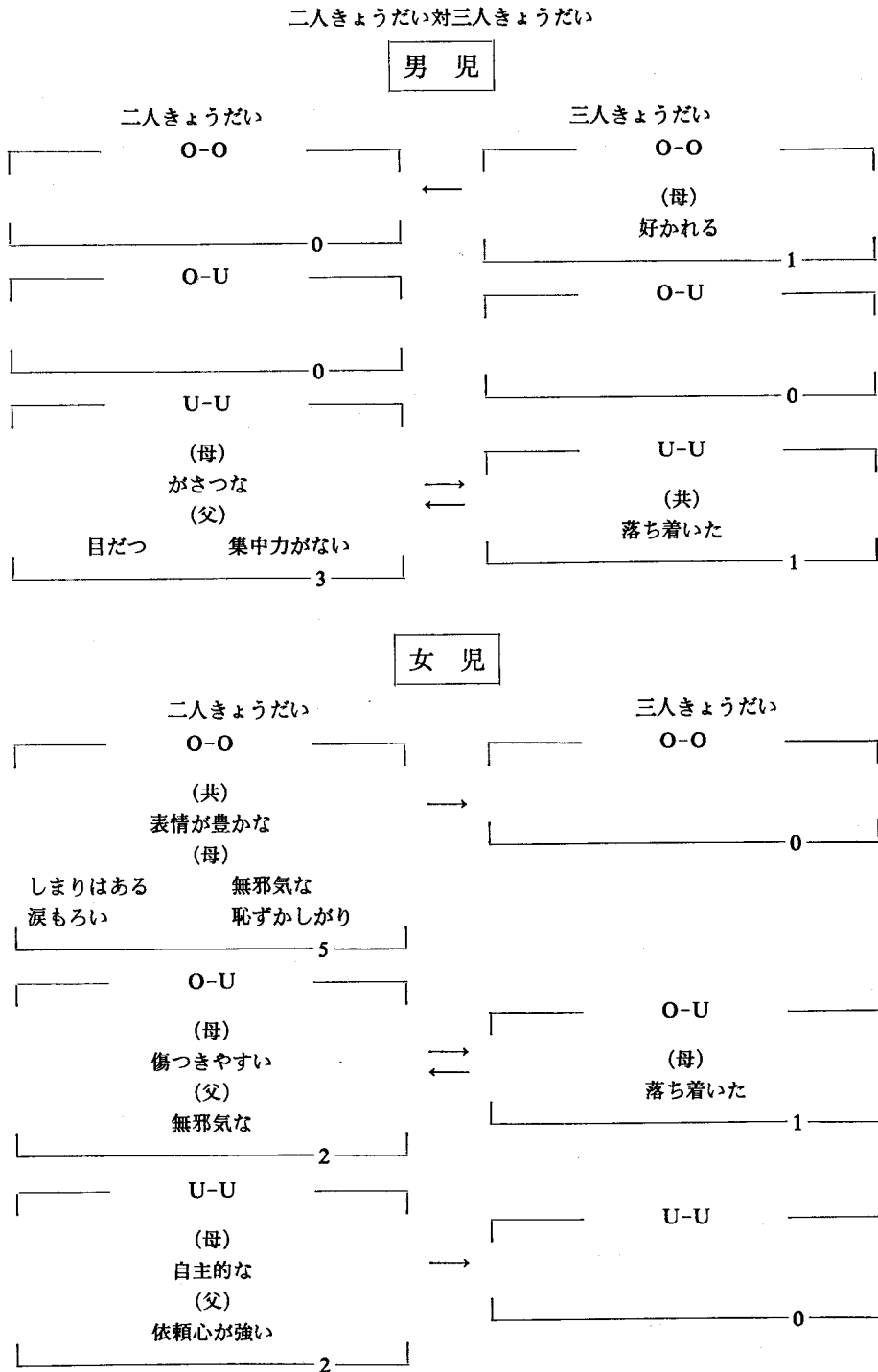


図4. きょうだい数からみた2群間の差異項目 (二人きょうだいと三人きょうだいの比較)

分析3: 出生順位からみた比較

出生順位については、今回は二人きょうだいの第一子対第二子、三人きょうだいの長子対中間子、長子対末っ子、中間子対末っ子という4つの組み合わせのみ検討の対象とすることにした。

3の1 養育態度

表7. 出生順位からみた養育態度の平均得点とSD

		男児					女児					
母親		At.	保護	服従	拒否	支配	(単位 点)					
		At.	保護	服従	拒否	支配						
二人きょうだい	第一子	10.3	4.6	7.6	6.8		二人きょうだい	第一子	10.6	4.2	8.0	7.8
	191	3.0	2.8	2.9	3.0	144		3.3	2.5	3.0	3.5	
	第二子	9.7	4.2	6.8	5.7			第二子	9.6	4.1	6.9	6.7
	183	2.9	2.7	2.8	3.2	171		2.9	2.6	2.7	3.1	
三人きょうだい	長子	10.4	4.9	7.8	6.5		三人きょうだい	長子	8.7	2.8	6.9	7.2
	31	2.3	3.1	2.8	3.3	34		3.2	1.9	2.9	3.0	
	中間子	9.4	4.2	7.1	6.8			中間子	9.1	3.7	6.6	6.2
	68	2.6	2.5	2.5	3.1	52		2.5	2.4	2.6	4.3	
	末っ子	10.0	4.7	5.9	5.8			末っ子	9.0	3.8	6.5	6.0
	62	2.8	2.7	2.3	3.0			51	2.3	2.5	2.8	3.1
父親						父親						
二人きょうだい	第一子	8.4	4.9	6.9	6.5		二人きょうだい	第一子	9.3	5.6	6.5	7.0
	174	3.3	3.0	3.3	3.2	131		3.5	3.1	3.0	3.3	
	第二子	7.9	4.5	6.2	5.7			第二子	8.2	4.7	6.4	6.6
	156	3.5	3.0	3.0	3.4	141		3.4	3.1	2.7	3.3	
三人きょうだい	長子	8.6	5.0	7.1	6.3		三人きょうだい	長子	7.7	4.2	6.4	6.3
	27	3.3	3.0	2.9	3.4	26		3.7	3.6	3.5	3.4	
	中間子	7.8	4.5	7.0	6.6			中間子	7.9	4.5	6.5	5.8
	57	3.3	2.8	2.9	3.0	42		3.8	2.6	2.5	3.8	
	末っ子	7.2	4.3	5.9	6.4			末っ子	8.7	4.9	5.8	6.0
	47	3.2	2.8	2.9	3.4			43	3.7	3.0	3.1	3.6

二人きょうだいの第一子と第二子の比較: 男女児共に母親は、第二子に比べて第一子の方により保護的である。しかし、同時に拒否・支配の平均得点もこれまた高い。これに対し父親の方は、男児の第一子には拒否的であり、第二子にはあまり支配的でないといえる。つまり、両親とも男児の第一子の方には厳しい態度をみせているのである。その他の場合については、父親が第一子の女児に対しては第二子の女児より保護・服従的な態度をみせ、母親の厳しさとは違って甘さのみせていた。

三人きょうだいについて: 末っ子の男児について母親は、拒否的態度が長子や中間子より

も有意に低いことがわかった。父親にも同じ傾向がみられたが、この場合には有意差はなかった。

男児と女児の比較：二人きょうだいについては、母親は支配傾向が男児よりも女児の方に第一子、第二子共々強い。父親は第二子の女児には母親と同じく支配的であるが、第一子の女児については男児より保護・服従的であり甘い。三人きょうだいの場合には、母親は長子である女児については男児と比べると保護・服従ともに平均得点が低くなっており、甘えさせてやらないといえよう。末っ子の女児も男児ほどには母親は保護的でない。これに対し父親の方は、末っ子の男児については女児に比べて保護的傾向が低いことがわかった (表7をもとにした t 検定 $P < .05$ による)。

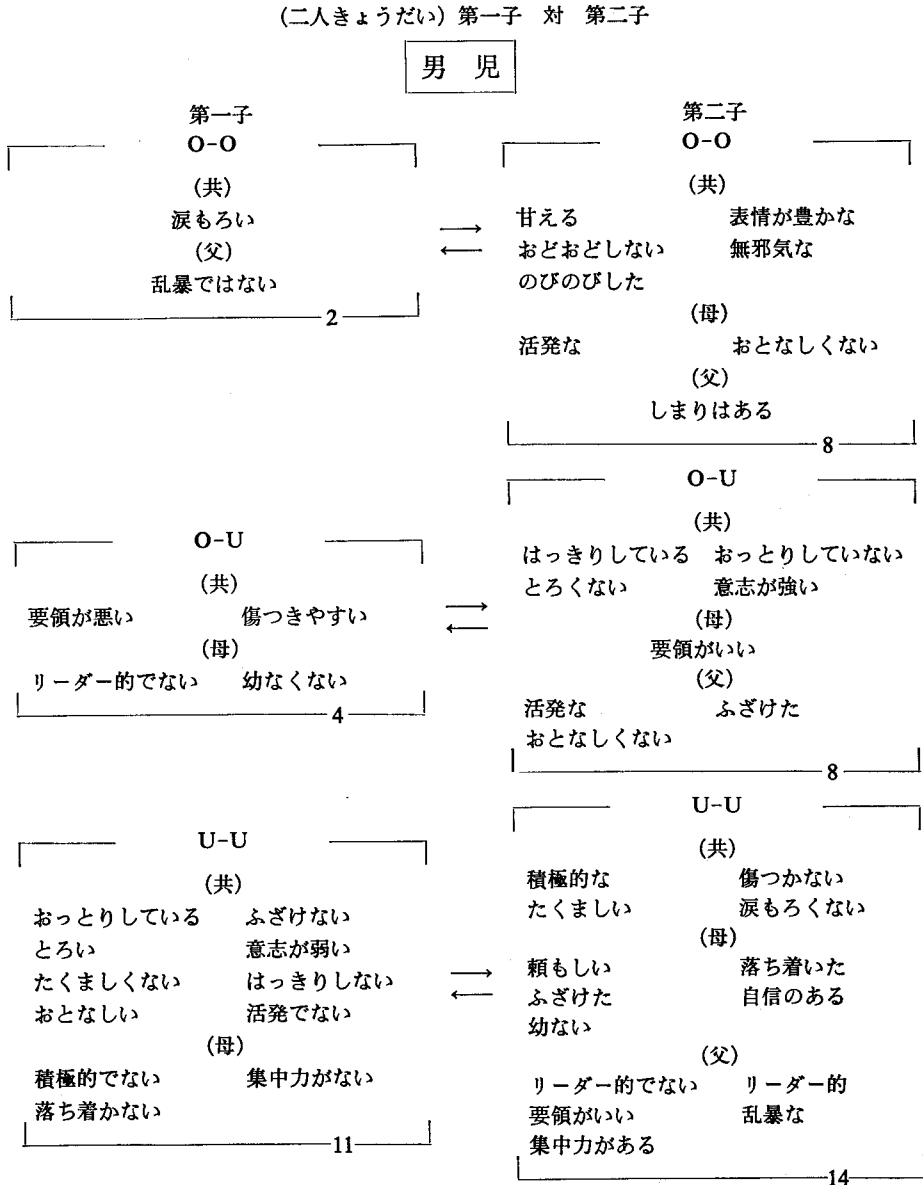


図5-1. 出生順位からみた2群間の差異項目 (二人きょうだいの比較—男児について)

3の2 性格認知

本調査で対象になった三人きょうだいの長子についての問題としては、得られた人数が他の子どもに比べるとかなり少ないということが上げられる。この人数上のアンバランスの為か、かなり高い出現率の差異をみせていても統計的には有意な差がでなかった。

まず、きょうだい間の年齢差をみていこう。二人きょうだいの第一子からみた第二子との年齢差は、2才差が41.2%、3才差が27.4%ついで4才差の14.6%、1才差の12.2%と続いている。第二子からみた場合もやはり同じような年齢差の順位となったが、5才差以上の出現が13.7%に増えた分だけその率は少なくなっていた（男女児込みで、年齢が明記されたものによる）。

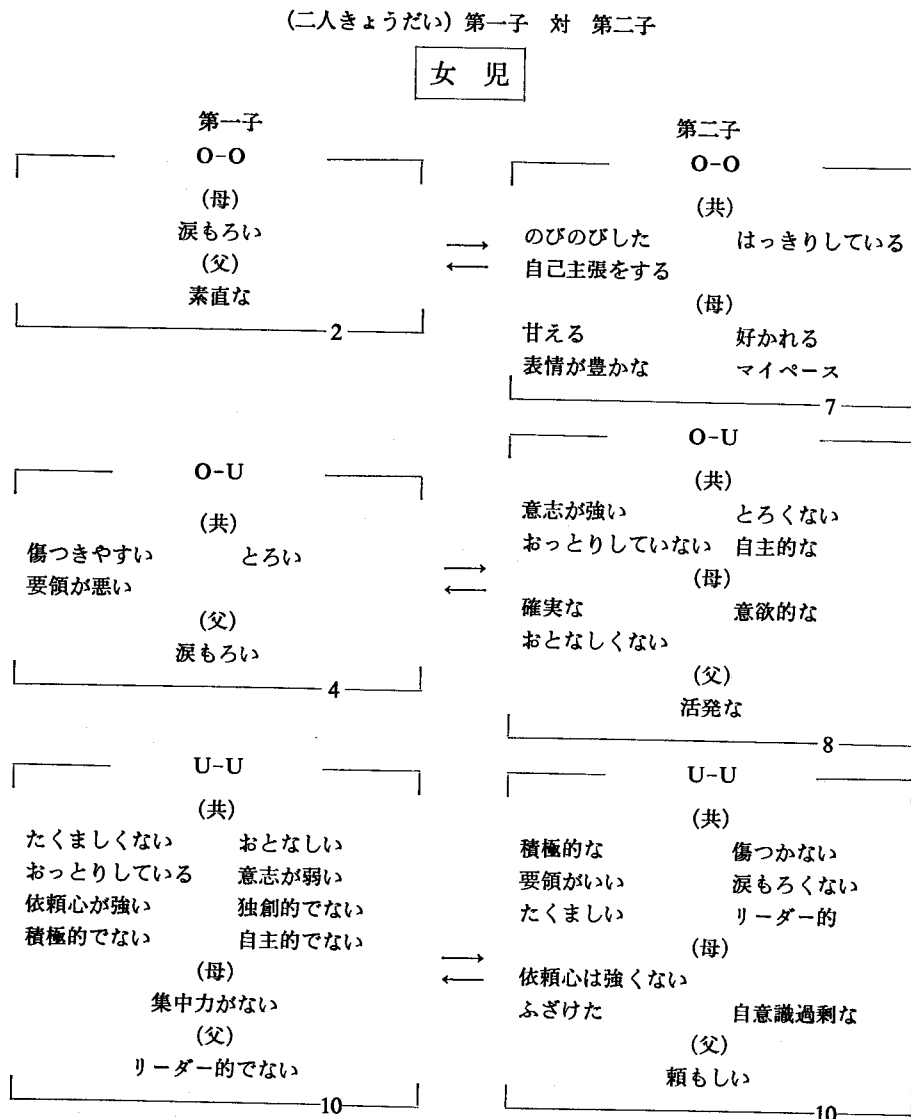


図5-2. 出生順位からみた2群間の差異項目 (二人きょうだいの比較—女兒について)

これに対し三人きょうだいの長子からみた中間子との年齢差は、2才差が58.5%、1才差が26.2%ついて3才差の12.3%であった。中間子からみると、長子との差は、2才差(54.9%)、3才差(21.2%)、1才差(17.7%)であり、末っ子との差では、3才差(38.1%)、2才差(22.1%)、4才差(15.0%)、5才差以上(15.9%)の順となっている。末っ子よりみた中間子との年齢差は、2才差のもの5才差以上のものとがともに26.1%と大きく2分され、4才差(19.1%)、3才差(17.1%)、1才差(9.9%)がその後が続いていた。

二人きょうだいにおける第一子と第二子の比較：図5をみると、何よりもまず抽出された2群間の差異項目の数の多さが目につく。なかでも第二子の方により多くの項目があがっていることがわかる。これは、三木・木村(1954)や依田・深津(1963)の研究とも一致する傾向である¹⁵⁾¹⁷⁾。差異項目の内容に視点を変えると、第一子の方は、依存的であり活動的でなく、また従順な印象を受けるのに対し、第二子の方はより愛嬌があり、独立的かつ活動的で、従順ではない動的なイメージが浮かび上がってくる。だが、男児と女児という性差による親の認知レベルでの判断には大差はみられない。母親と父親が取り上げた項目についても共通したものが多く、また母のみ、父のみでの差異項目にもそれほど質を異にするような判断はなされていない。今回分析に用いられた50の性格項目についてみる限りでは、この比較で抽出された差異項目は、出生順位による差であるといってもよからう。2人の子を持つ親は、第一子と第二子の性格を認知する際に、かなり明確な判断の基準をもっているといえる。言い換えれば、二人っ子については、二者をはっきりと区別してみているということである。しかし、育児とかしつけにおける実際の生活場面への対処について、この事がどの程度の影響をもたらすのかは、この研究からは何もまだ言えない。

三人きょうだい間の比較：二人きょうだいの場合と大きく違う特徴は、差異項目の数が少ないことと、両親の認知の仕方に共通したものがあまり出現しなかったということであろう。さらに、男児の長子の場合これといった個人的特徴をみせる性格的な差異がなされないのも注目し得る。男児の末っ子については、父母に共通した差異項目は少ないけれども、長子との比較では母親の方に、中間子とでは父親の方にかなり好ましい印象の強い項目が上っている。相対的にみて、末っ子は三人きょうだいの中ではそれなりに親にとって目につく存在なのであろう。

女児の場合には、末っ子と比べた時、長子と中間子に多くの差異項目が潜在的性格認知群(U-U区分)に上っていた。ただし、長子の方は母のみの選択、中間子の方は父のみの選択による項目が多いという違いはある。いずれにせよ、内容としては共にマイナス的な印象の方が強いものである。末っ子は中間子と比べると、顕在的性格認知群(O-O区分とO-U区分)でプラスのイメージが強い認知を受けている。しかし、長子と比べた場合には特徴ある差異項目の出現が乏しい(図6、出現率については付表4-1、4-2参照)。

一人っ子と第一子・長子との比較：二人きょうだいの第一子や三人きょうだいの長子は、生後しばらくの間、一人っ子と同じ様な家庭での親子関係を体験する。しかし、弟や妹の誕生により、種々の葛藤を経験せざるをえなくなる。この事は、きょうだい数の比較でみせた以上の違いを生じさせるものと考えられる。図7をみると、弟妹の存在が親の子への性格認知の差異にあまり大きな影響を及ぼしていないというような結果になった。本研究のような比較方法では、一人っ子の特徴または弟妹の影響をうまくクローズアップさせることはできないのかもしれない。

(三人きょうだい)

男 児

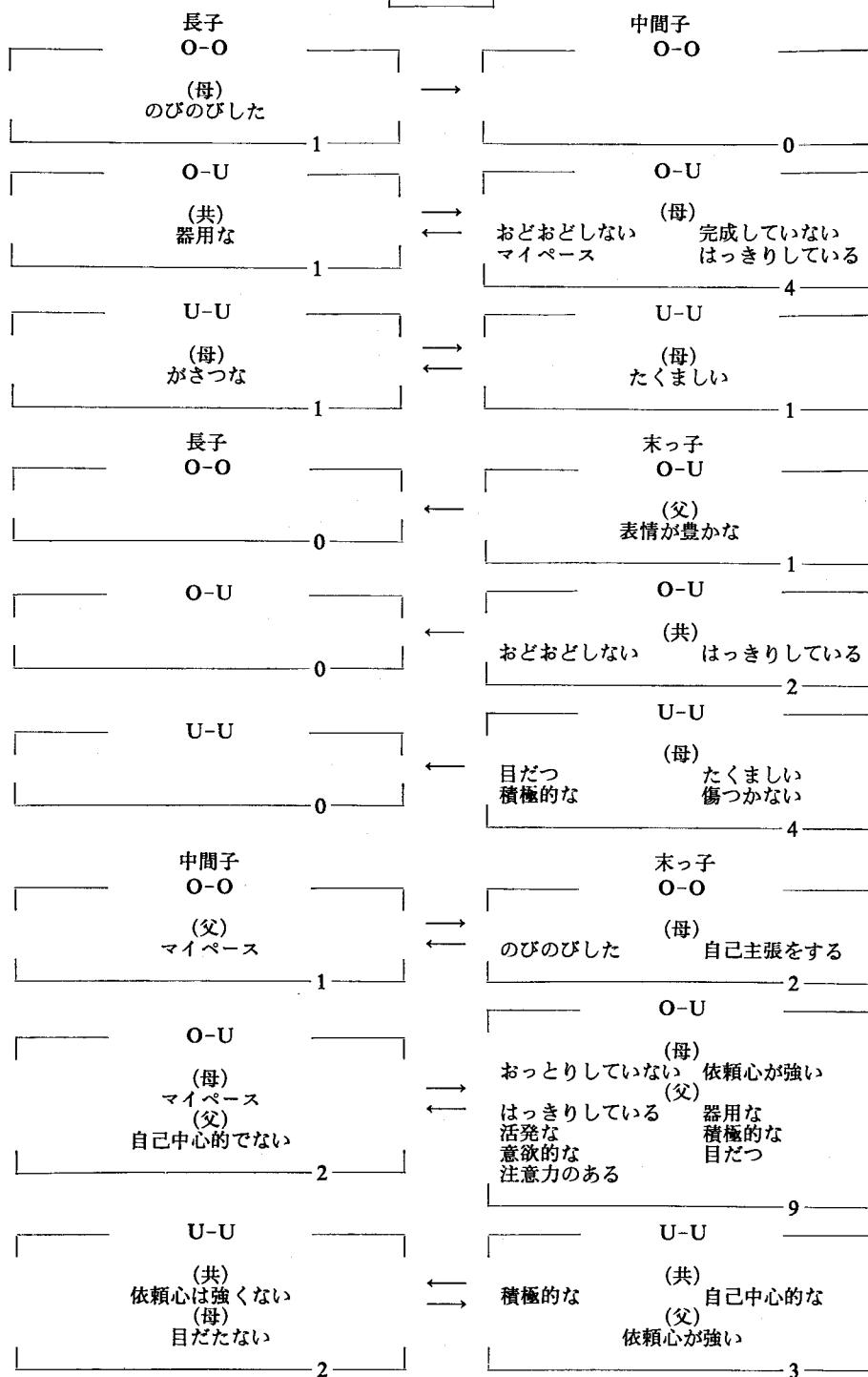


図6-1. 出生順位からみた2群間の差異項目 (三人きょうだいの場合—男児について)

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

(三人きょうだい)

女 児

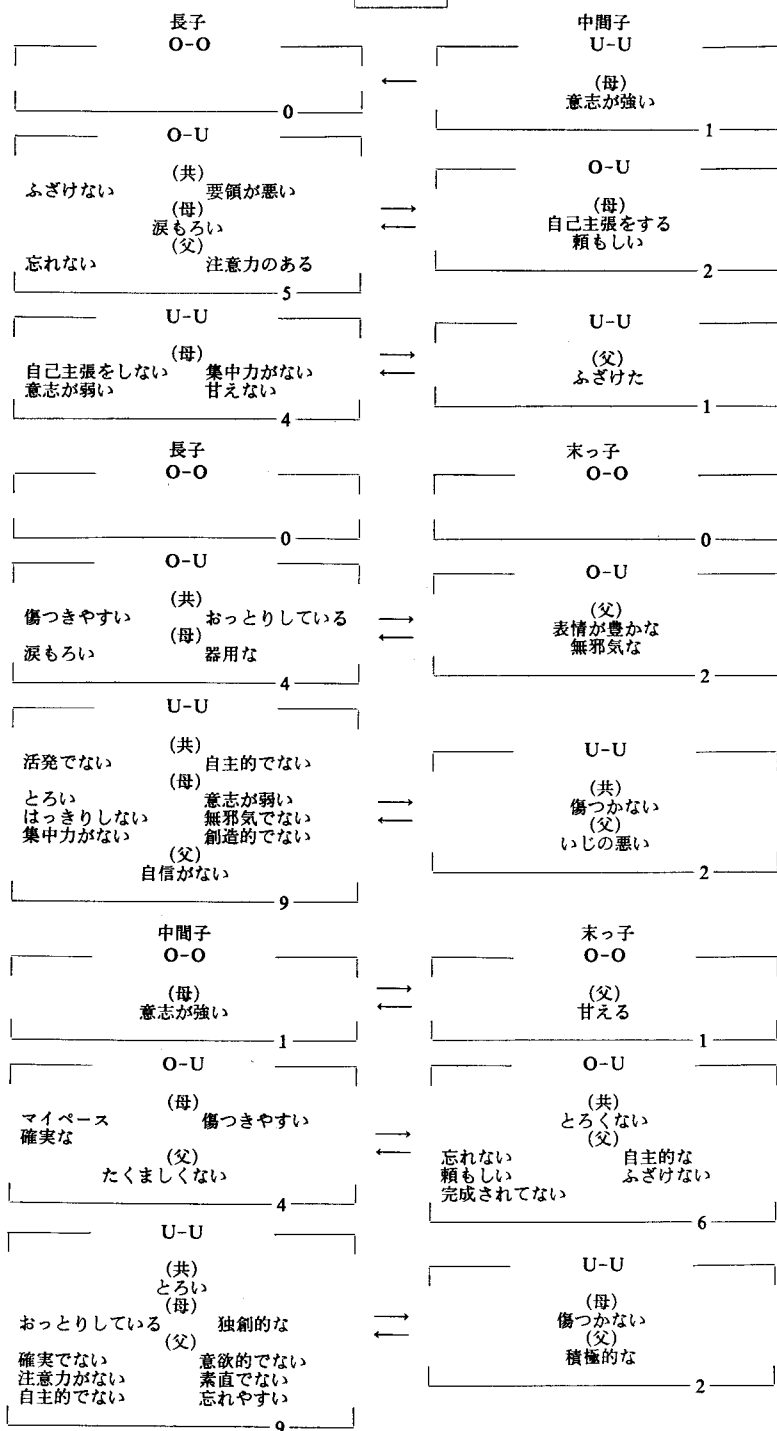
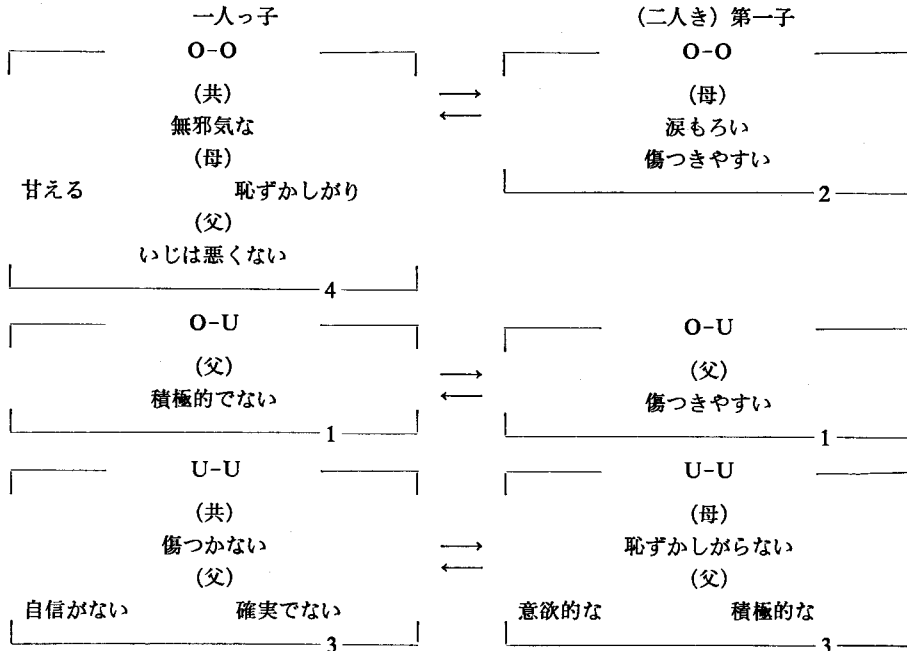


図6-2. 出生順位からみた2群間の差異項目 (三人きょうだいの場合一女児について)

一人っ子 対 二人きょうだいの第一子

男 児



女 児

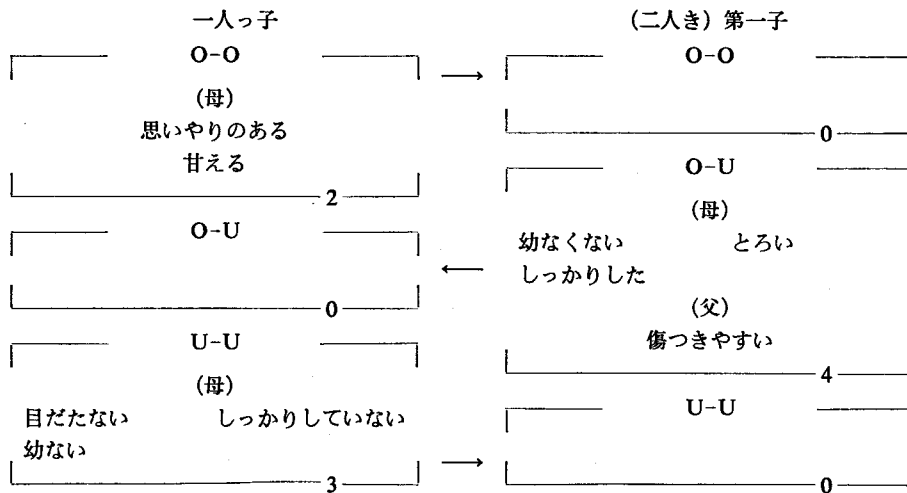
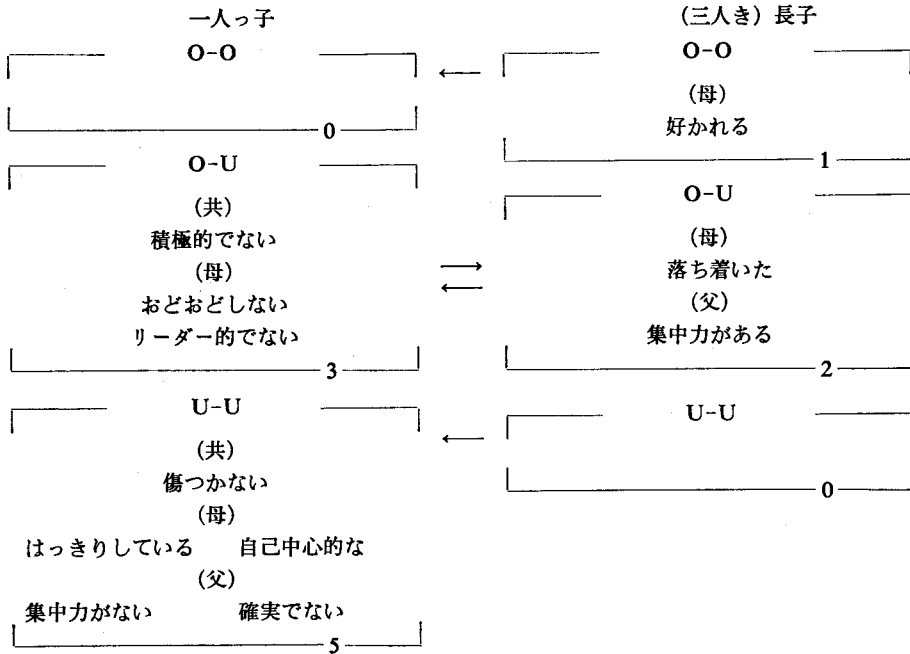


図7-1. 一人っ子と第一子(二人きょうだい)との差異項目

一人っ子 対 三人きょうだいの長子

男児



女児

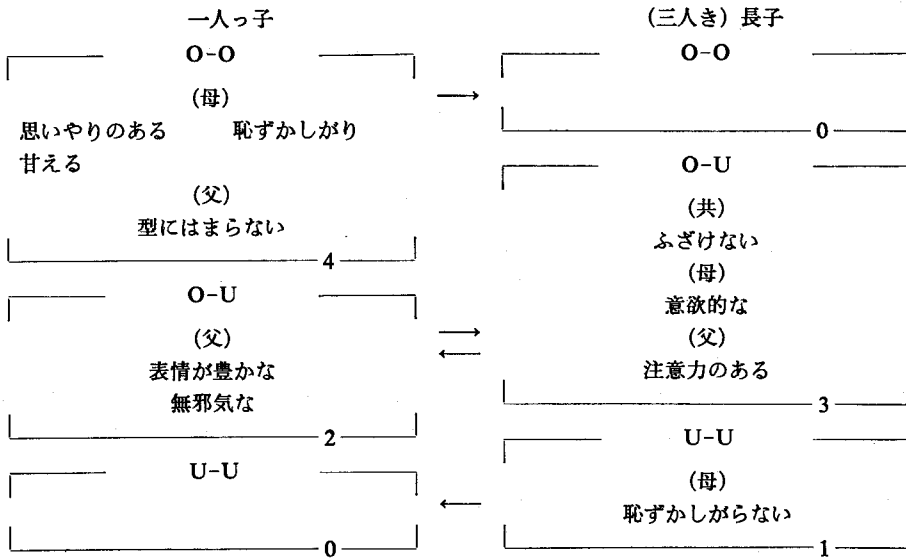


図7-2. 一人っ子と長子(三人きょうだい)との差異項目

分析4: 性別構成(二人きょうだいの場合)からみた比較

ここでは、第一子同士、第二子同士の比較と、第一子と第二子の比較(同性ペアと異性ペア)の4つを分析対象に取り上げた。なお、Mとは男児を、Fとは女児を表わす。また、Ⓜ-Mとは男二人きょうだいの第一子(長男)ということの意味している。

4の1 養育態度

表8. 性別構成からみた養育態度の平均得点とSD

		男 児						女 児			
						(単位 点)					
母親		保護	服従	拒否	支配	母親		保護	服従	拒否	支配
At.						At.					
Ⓜ-M	10.1	4.5	7.9	6.9	Ⓧ-F	10.0	4.3	7.9	7.5		
111	3.2	2.6	2.9	3.2	67	3.6	2.8	3.2	3.4		
Ⓜ-F	10.5	4.8	7.3	6.6	Ⓧ-M	11.1	4.2	8.1	8.1		
80	2.7	3.1	2.8	2.7	77	2.9	2.3	2.9	3.6		
M-Ⓜ	9.6	4.0	6.5	5.5	F-Ⓧ	10.1	4.6	7.0	6.8		
114	2.7	2.4	2.5	3.0	93	2.8	2.7	2.5	3.3		
F-Ⓧ	9.8	4.5	7.2	6.1	M-Ⓧ	9.1	3.5	6.8	6.5		
69	3.2	3.0	3.2	3.5	78	2.9	2.4	2.9	2.8		
父親						父親					
Ⓜ-M	8.3	4.7	6.8	6.7	Ⓧ-F	8.7	5.5	6.9	7.0		
97	3.1	2.9	3.2	3.1	63	3.5	3.2	3.2	3.3		
Ⓜ-F	8.5	5.1	7.1	6.3	Ⓧ-M	9.9	5.7	6.2	7.0		
77	3.5	3.1	3.4	3.2	68	3.4	3.0	2.7	3.3		
M-Ⓜ	7.9	4.5	6.3	5.8	F-Ⓧ	8.6	4.7	6.5	6.8		
98	3.4	3.1	3.1	3.4	77	3.3	3.2	2.6	3.6		
F-Ⓧ	7.9	4.5	6.1	5.4	M-Ⓧ	7.8	4.6	6.3	6.4		
58	3.7	2.7	2.8	3.4	64	3.5	2.9	2.9	3.0		

M=男児, F=女児, ○=親の評定の対象児

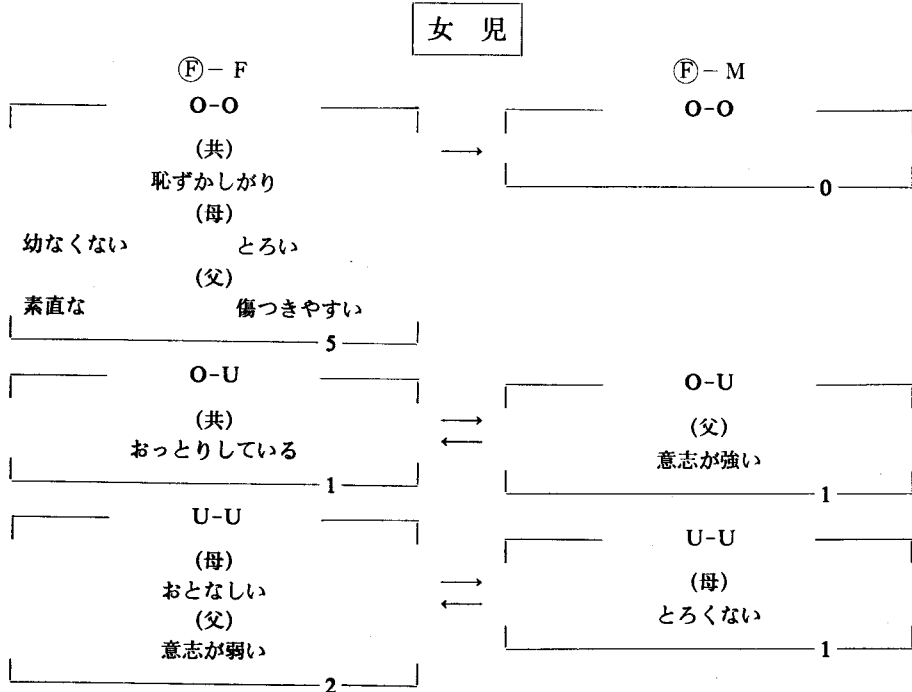
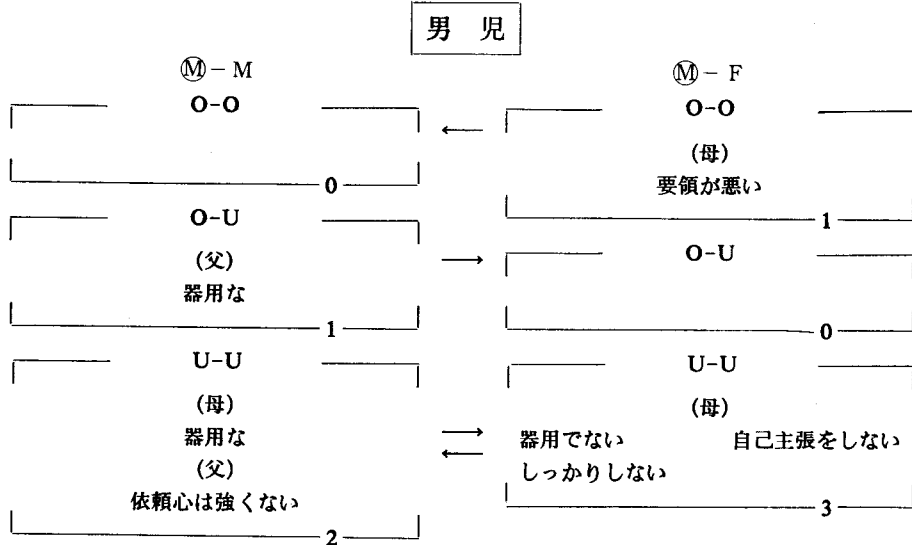
男児間の比較で有意差をみせたのは、男児同士の同性ペア(M-M)のみであった。母親は長男に対しては、より拒否的であり支配的である。一方、女児の方は、性別構成の次元からとらえてみても、親の態度にはかなりの相違があるようだ。まず女児同士の同性ペア(F-F)をみると、長女については母親は拒否的態度が強い。また、異性ペアⓍ-Mの長女については、Ⓧ-FやM-Ⓧの女児よりも、父母ともに保護的であった。しかし、M-Ⓧの第二子だが長女と比べると、両親の態度には差が出た。母親は彼女に対して拒否・支配的な態度も強いのに、父親の方は服従的で甘い態度で接していることがわかったのである。この第二子ではあるが長女でもあるM-Ⓧは、同性ペアF-Ⓧの次女と比べると、母親のみせる保護・服従の平均得点は共に低い。上が姉である程には同じ第二子の女児ではあっても、それほど甘やかされていないといえる。この事は、長女としての役割期待の方が、第二子としての立場より強いというこ

とを意味しているのだろうか。

次に、男児と女児を比較してみよう。母親は女児の方に支配的な強い態度をみせている (Ⓔ-M > M-F, F-Ⓔ > M-M)。また、F-M の第二子・長男に対しては、M-Ⓔ の第二子・長女よりも母親は服従的である。一方父親は、異性ペアのきょうだいの第一子についてのみ態度に差をみせた。この関係における比較では、長女の方が長男よりも保護的に扱われている (Ⓔ-M > M-F)。

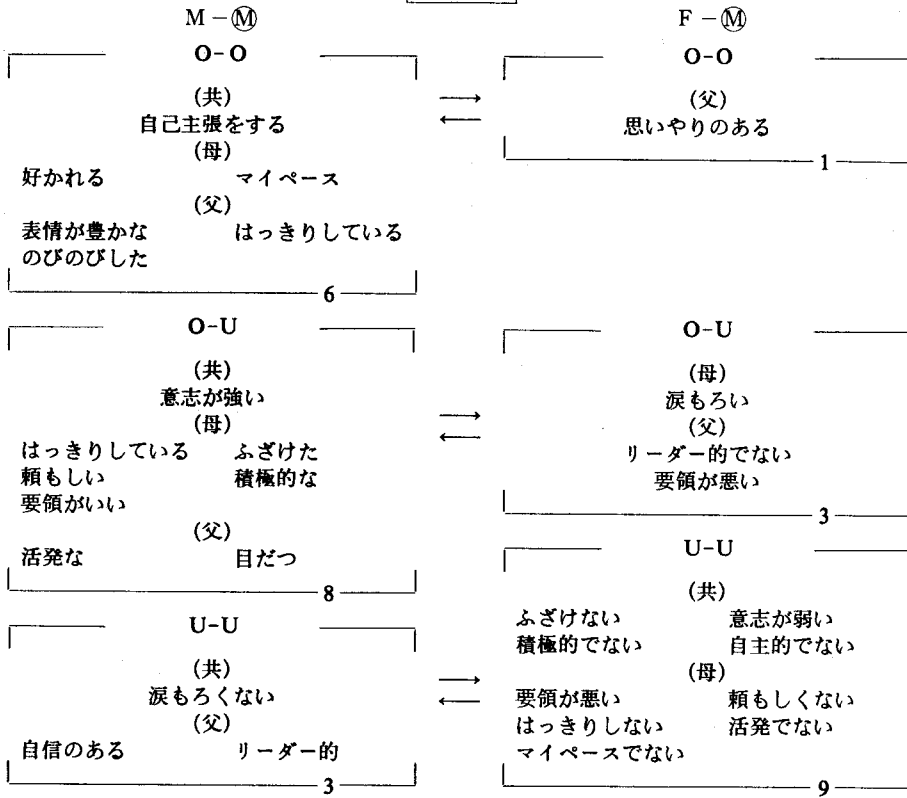
以上、表 8 をもとにした t 検定 (P < .05) の結果による分析である。

— 第一子の比較 —



—第二子の比較—

男児



女児

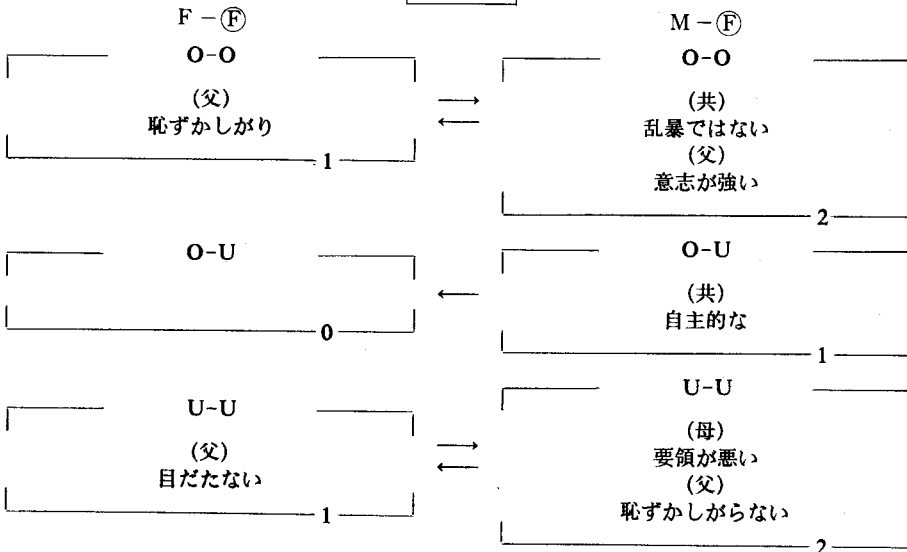


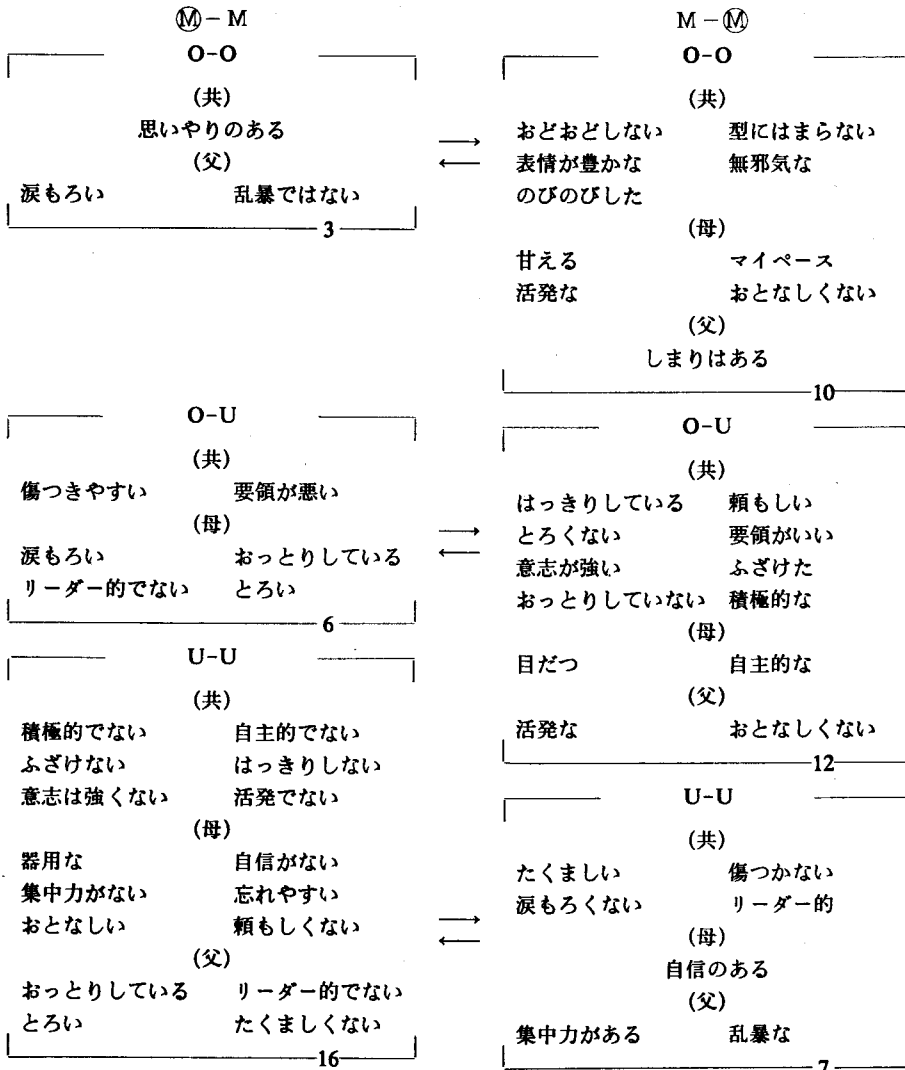
図8. (性別構成) 第一子の比較と第二子の比較における差異項目

4の2 性格認知

Ⓜ-M と Ⓜ-F という長男同士の比較では、父母共通の差異項目はなく、両親別の出現をみてもその数は非常に少ない。これに対し、M-Ⓜ と F-Ⓜ という第二子だが次男と長男という比較になると、差異項目は増大する。この2者間の比較で目をひくのは、同性ペアの第二子(次男)では顕在的性格認知群に入る項目が目だつのにに対し、異性ペアの第二子(長男)の方は、顕在の方ではなく潜在的な性格認知群において、その特色をみせていることであろう。表面的にはっきりと浮上してこないマイナス的なイメージが、主に母親の認知の中に潜んでいるみたいである。第二子ではあるが長男だという役割期待とのずれが、このような認知につながっていくのであろうか。

—同性ペアの第一子と第二子の比較—

男 児



女 児

Ⓕ - F		F - Ⓕ
O-O		O-O
(共)		(母)
乱暴ではない 素直な	涙もろい	甘える 表情が豊かな
		2
(母)		
	幼くない	
(父)		
やさしい	いじは悪くない	
	6	
O-U		O-U
(共)		(共)
傷つきやすい 要領が悪い とろい	おっとりしている たくましくない	おとなしくない 意志が強い (母) 自己主張をする (父) 頼もしい
		6
(父)		
リーダー的でない		
	6	
U-U		U-U
(共)		(共)
おとなしい 積極的でない	意志が弱い	要領がいい 積極的な たくましい
		傷つかない 涙もろくない
(母)		(母)
依頼心が強い 自信がない	集中力がない 意欲的でない	依頼心は強くない (父) リーダー的
		7
(父)		
自主的でない 頼もしくない	おどおどした	
	10	

— 異性ペアの第一子と第二子の比較 —

男 児

Ⓜ - F		F - Ⓜ
O-O		O-O
(父)		(母)
要領が悪い		無邪気な (父) 甘える
		2
O-U		O-U
(母)		(父)
要領が悪い 傷つきやすい	幼くない たくましくない	無邪気な とろくない
		2
(父)		
目だつ		
	5	

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

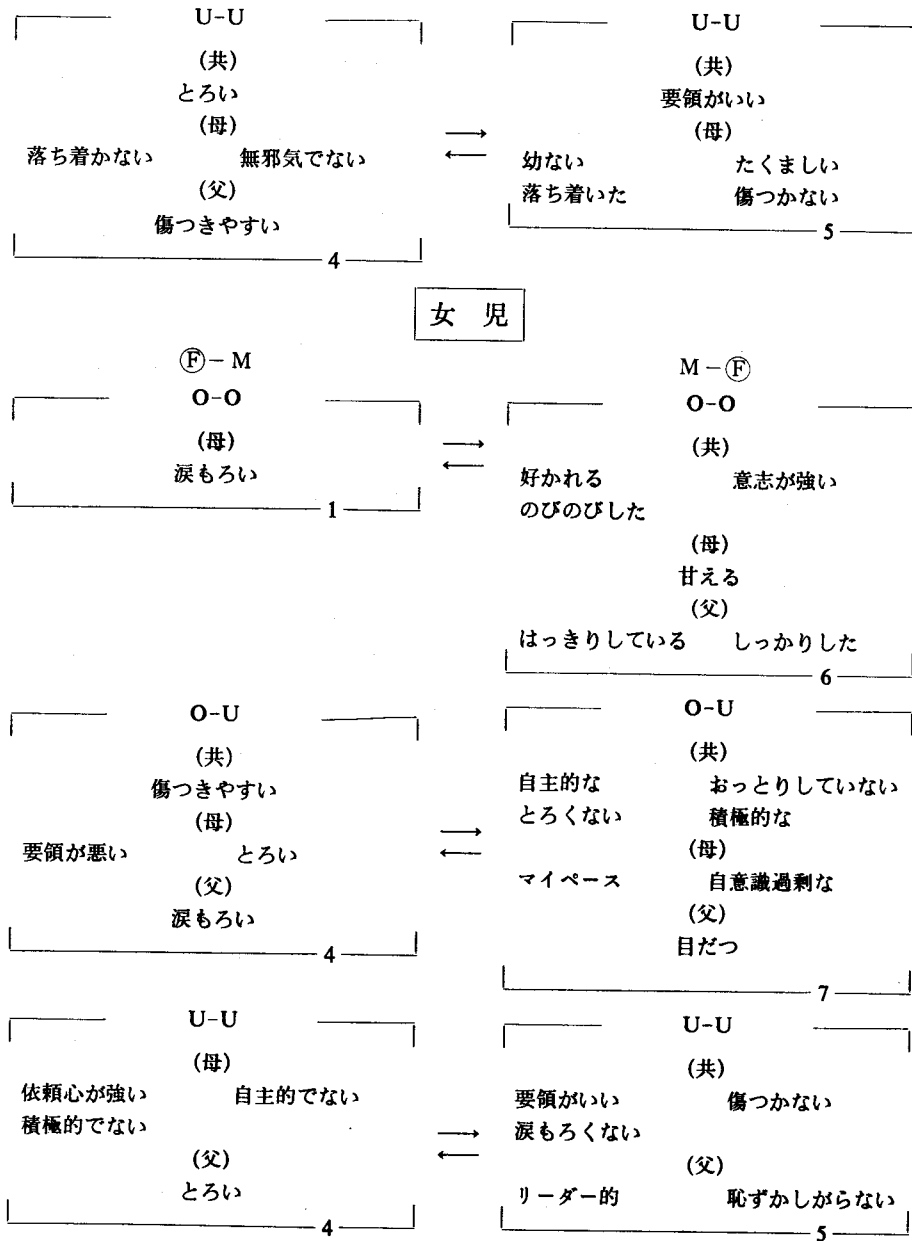


図9. (性別構成) 第一子と第二子間の比較による差異項目

女兒については、第一子の比較、第二子の比較ともに明確な性格上の差異を抽出できなかった(図8.出現率については付表5-1, 5-2参照)。

性別構成による分析でも、第一子と第二子間の比較になると、様子が一変してくる。男児の同性ペア(M-M)の長男と次男では実に鮮やかな対比的特色をみせている。しかしながらここでも言えることは、もちろん両親の認知レベルでの把握をみたものという範囲内でのことではあるが、次男(M-M)の方にプラス的な認知が集中している。顕在的性格認知群に入るたくさんの差異項目があり、ダイナミックでしかも子どもらしい子どものイメージを抱かせる内容に

なっている。これに対し一方の長男 (M-M) については、依存的で活動性に乏しく、従順で静的性格の面が強い子として両親に受け止められているかのようだ。異性ペアによる第一子と第二子の比較では、同性ペアの子ほどの差異項目は出現していない。とすれば、先ほどの出生順位分析でみられた第一子と第二子の差異的特色は、主にこの同性ペアの子の間で得られた差に基づくものであったといってもよからう。

女兒についても、男児と同じようなことが同性ペア (F-F) では言える。しかし、次女 F-⑥ の場合には、顕在的性格認知群に入る差異項目が少ない。異性ペアでは、第一子同士の比較で差異項目の出現があまりみられなかった ⑥-M の長女は、同じく M-⑥ の第二子・長女と比べても、数は増えてはいるけれどもやはり少ないものであった。下に弟がいる場合と上に兄がいる場合とでは、同じ女兒であっても親の認知には差がみられるものらしい (図9, 付表5)。

男児であれ女兒であれ、第一子と第二子間の比較の方が、親にとっては識別しやすいようである。親のわが子に対する性格の判断とは、同じ性をもつきょうだいを直接比較の対象とすることによって、より容易になるという一般的な結論になりそうである。この結論が三人きょうだいにおいても事実かどうかは、組み合わせの数が男女児共12通りもあり、それぞれに得られた人数が少なく、数量を扱う今回の分析検討の対象とすることができなかった為に、証明することが難しい。

以上のような諸分析からわかった事は、長男であれ長女であれ第一子というものは認知レベルではあるが、かなりマイナス的というか静的・依存的なイメージを親に抱かれているということである。これが親の評価へとどうつながり、育児としつけの面とどのように関係づけられていくのだろうか。これも今後の研究課題の一つである。

分析5: きょうだい間の識別に親がよく用いた性格項目

親がわが子の性格を識別するときに、どのような性格項目をよく用いるのであろうか。使用した50項目のうちから抽出してみた。今回は13組のきょうだい間の比較を試みたが、得られた差異項目を次のようなやり方で再度まとめなおした。親のいずれかによって選択され、男女児の両方またはいずれかにその差異項目がみられれば、使用1回とする。13組の比較のうち6組以上で出現をみせた項目を表にしたのが表9である。

表9. 親がきょうだい間の識別によく用いた項目

10組(出現率77%)	8組(出現率62%)	7組(出現率54%)	好かれる
意志が強い	集中力がある	意欲的な	頼もしい
傷つきやすい	涙もろい	おっとりしている	思いやりのある
積極的な	無邪気な	甘える	幼ない
9組(出現率69%)	恥ずかしがり	リーダー的	自己主張をする
目立たない	自主的な	6組(出現率46%)	ふざけた
はっきりしている	要領がいい	自信のある(男>女)	活発な(男>女)
	たくましい	表情が豊かな	のびのびした(男>女)
	とろい		依頼心が強い
			マイペース

ここで、先に検討をした園の教師による多人数選択項目(分析1の表5)と比べてみるならば、幼児期にある子どもについての家庭での親の見方・とらえ方と、園における教師のそれとの類似や相違をみることもできる。この両親と園の教師というおとなの側の微妙な認知差が、

さらに子どもの人格形成に影響を与えていくのであろう。ここにも、これからの研究のための新しいテーマが埋れているように思う。

討 議

本研究の意義の一つは、母親だけでなく父親も対象にして調べてみたことにある。今回の調査は、夫婦間の話合いの一助にでもなればというわれわれの配慮が、同一用紙への記入という方式をとらせたのであるが、代理回答の可能性がなかったともいえず、また、相互比較ができるために後から記入する親の方にバイアスがかかったということも多に考えられ、やや厳密性を欠く調査であったかもしれない。

このような調査方法に基づく不備とか限界もあるが、本報告は、幼児は「……」という性格を持っているということをねらったものではなく、子育てをしている親がどのような態度で幼児期のお子に臨み、かつ、どのように子の性格を把握しているのかについて調べた研究なのである。つまり、「子」でなく「親→子」へと分析の観点を変えることによって、この論文が出来上がったといえる。しかしながら、あまりにもたくさんの子どもの側の要因（つまり、きょうだい構成）を取り上げて分析検討した為に、きめの細かい解釈とか、他の研究との比較をする紙面的な余裕がなくなり、きわめて粗いものに終わってしまったという感じは否めない。しかし、一度はこういう形でまとめ上げておかないことには、この分野での次の手が打てない状況にあったこともまた確かである。

依田 (1978) は、長子には厳しいしつけ、末っ子にはおだやかなしつけを母親がとることを多くの研究結果より証明してみせている¹⁸⁾。本研究の結果にこれを当てはめて考えるならば、親の強い役割期待が第一子について厳しい性格認知をみせることになったといえるのだろうか。もしそうであるとすれば、親の子に対する許容度の差が子の性格差異の決め手ということになる。しかし、このような推論的解釈からいくと、子の性格の問題というより、子をみるおとなつまり親の側のおおらかさといったような問題という事にもなってくる。また、三輪 (1978) も述べていることではあるが¹⁶⁾、長子 (第一子) としての自覚をもたせるためにきょうだいを区別することが、子どもの側からいえば不公平な扱いと映るかもしれず、人格形成の上からも一つの問題となりうるであろう。

幼児期の子の人格は、主に家庭における人間関係の相互の力動的な関連の中で培われていくと言われる。これを今回はまず認知レベルの問題として取り上げてみたが、特に2人っ子的場合に、かなりの認知的な差異を親がみせたという事実に注目すべきであろう。親は各々自分の認知を基にして、子を評価していると思われるので、役割期待とか育児・しつけなどといった種々の行動レベルでの実行 (接触) にも影響を与えていくことだろう。さらに、これに親の側の情緒が複雑に絡み合い始めるとどのような事になっていくのだろうか。このような推論の展開は、現在の日本社会において多発している親子関係上の諸問題を解明するための一つの方向を示してくれるものになるかもしれない。

この論の展開は、情緒の発生メカニズムに対し独自の見解を提唱した Arnord, M. の理論に結び付く。この理論は、情緒的体験を知覚—評価—情緒—表出—行為という一連の連鎖によって説明していく。情緒は知覚や評価という認知的側面と不可分な関係におかれるべきであり、そこから得られた接近すべきか回避すべきかの判断傾向が、情緒の現われ方に差を生じさせるという見解なのである⁷⁾。子の性格認知が、親の子への評価の基準を作り上げ、これを家庭生活の中でみせる子どもの行為と結び付けていく。さらに情緒レベルとの絡みで、「やっば

り……」という確認の判断を伴わせることにより、いつの間にか親と子の間の行動レベルでの回路もまた、そのように固定化していくとは言えない。

期待に照らした判断さらには思い込みなどが子どもの持つ性格の客観的把握と複雑に混ざりあい、親→子への認知レベルですでに差をみせる。しかも二人きょうだいの出生順位と同性ペアの比較の場合にそれが特に顕著である。少子化時代を迎え、しかもどんどん核家族化している日本や欧米諸国の社会現状に目を向ける時、われわれ親たるおとながこの事実をしっかりと受け止め、改めて見詰めなおさなければならない大きな問題を内蔵しているといえる。

本報告で試みられた両親の同時分析は、子どもを受け止め包みこむ原理（母性原理）と、子どもの発達を見通し方向づける原理（父性原理）との調和のテーマとも深い関連をみせていくことだろう。つまり、子どもを一個の人格として取り扱うことの大切さを考えるならば、そこには父性と母性のバランスのとりの調和こそが大切なのだとみる臨床家河合の主張とも結びついてくるのである¹³⁾。3人の子を持つ親の養育態度や子への性格認知が、あるべき親子の姿の一面を垣間見させるものであると仮定できるならば、次のようなことも言える。2人の子持ちの親がみせた幼ないわが子に対するはっきりとした性格の識別の増大化傾向、それも第一子に対するマイナス的なイメージの強い差異の認知は、日常の家庭生活での育児やしつけとどのように関わっていくものなのであろうか。これは、親子関係の密着化に伴うきょうだい関係や友人関係の稀薄化現象へと、さらに拍車をかける素因ともなりかねない。きょうだい関係の中に子どもを位置づける時、親は子がまだ幼ない頃から異なる態度で養育し、また異なる認知をすでにみせ始めるわけである。こういった日常生活場面における積み重ねによってもたらされる効果の違いが、2人の子の人格形成に及ぼす影響は大きなものにならないだろうか。子の性格の識別の際に、親の心の中に意識的であれ、無意識的であれ、満足—不満足という次元にかかわる認知の差異があり、それがどんどん低年齢化傾向をみせていくとすれば、どうなる事だろう。知育偏重傾向の強いわが国では、ますます親にも子にも大きな問題をかかえさせることになっていくような気がしてならない。これはあまりにも深刻な受け止め方であるという気もするが、親として常日頃より心しておくことは大切なことであろう。

われわれの研究のもう一つの特徴は、潜在的な性格認知群を設けることができたことにあると思う。この群の中に入る差異項目は、出現率こそ低いけれど、きょうだい間比較で幼ない子を見る場合に無視できない特徴を捉えていたのである。あくまでも統計的な手法をもちいて抽出された差異項目ではあったが、この群内における項目分析は、親の心の内側に存在する前意識のレベルを連想させてくれる。臨床的な見方をする時、ある時期（ここでは幼児期）では一人の親の心の中であまりとは意識化されていないが、何となくそうではないか（前意識レベルで）と感じてはいる。やがて子どもが成長・発達していくにつれて、親の意識の中でも顕在化してくる性格項目なのである。これはわれわれにとって魅力的な解釈である。しかし、あまりにも解釈に飛躍がありすぎるともいえる。自己満足にすぎないのかもしれないが、これからの一つの方法論提供への道を切り開ききっかけになるかもしれないと期待しているものである。

これからのわれわれの親子関係の研究に大きな指針を与えてくれそうな人に、亀石・狩野（1983）と鯨岡（1981）がいる。亀石らの試みは、親子関係における相互作用を扱う枠組の論議に「統制」概念を導入しようとするものである¹¹⁾。鯨岡は、子どもをあくまでおとなとの関係の中での存在として見ていく必要性（関係的存在としての子ども）を説き、子どもが個体として成長する場合は、親と子のかかわりの場であり、それが子どもの生活世界であると論じている¹⁴⁾。ある時点における子どもの全体像をおとなとの関係の中でとらえなおしてみようという

考え方には、(難かしいことではあるが) まったく賛同せざるをえず、共にこれから歩まねばならぬ研究の道であろう。さらに、発達臨床を志すためには、金平・鈴木(1981)が「子どもにとって何よりも大切なのは、情緒的な安定を得ることであり、その土台の上に自主性・社会性といった個々の特性が培われていく」と述べている¹²⁾が、この配慮もまた十二分に必要なことである。平井(1976)が子どもの個性化のために強調している内容とまったく同じものであり¹⁰⁾、われわれの共通認識でもある。

本報告は、認知レベルにおける親→子の関わりを、幼児をもつ親について試みたものであった。これは、秋山が並行して研究を進めている自己形成と親子関係のテーマの他のものと結びつけていかねばなるまい。その一つは、別の研究グループで続けている性格特性のより深い検討への方向であり¹⁹⁾、いま一つは、逆の関係になる子→親への認知的関わりについての研究のより一層の推進である⁵⁾⁶⁾。親が期待するものと、子が自己をみつめ、それを両親との比較において認知していく、この認知・評価→行動の関係の中にさらに情緒を介在させたらどうなるか。発達の節目節目で、親と子がこの3次元の関係の中で相互に確認しあい、調整していく努力をはらうことこそが、さらにお互いの人格を高めることにつながり、実在的な己の存在をとらえなおすよいチャンスともなることだろう。これは、親の子離れ、子の親離れの心の準備でもある。これからの少子家族化を迎える社会の中での大きな人間的課題の一つになることだろう。この家庭における親子関係を、Erikson, E. H. の自我発達理論 (life-cycle 理論) との関係で捉えなおしてみるのも面白い⁹⁾。

ここまでくると発想の転換が生じる。討議で述べていることは、子どもの側の課題であると同時に、それ以上に大きなおとな(親)の側の課題なのではないかということである。親がみた子の性格認知とか養育態度といった捉え方より、これから先の親自身の問題であるということだ。少子化・核家族化の波の前には、親と子の関係はいつもたての関係とだけは言っておれなくなるだろう。よこに並んでしまったり、ひょっとすると先を越されて、後からフーフーいながら追って行くしろの関係にさえなりうる可能性は十分ある(鯨岡も述懐しているが、自分がいろいろな面で未熟さを感じさせられている親だからであろうか)。われわれは長いようで短い子育てにおいて、上(前)から導びき、横から励まし励まされ、後からわが子の成長を見上げ、そしてできることならば、再び子の前に立ちたいと願う。人間としての相互共感、励ましと労わり。これはもう子育てというより、同じ一回限りの自分だけの人生を歩もうとする同伴者としてのそれと同じことだ。

やはり、人生とはマラソンである。

(謝辞) 本研究にご協力いただいた園の先生方、ならびにご両親の皆様方に厚くお礼申し上げます。何度も投げ出したくなったこの論文化への長い道程を支えてくれたものは、調査に快く協力して下さった皆様への感謝の気持ちでした。まだまだ未熟なまとめではありますが、これを踏み台にしてさらに頑張りたいものと考えております。

文 献

- 1) 秋山幹男・堂野佐俊 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知(その1)——地域別にみた養育態度—— 中国四国心理学会論文集 14 62 1981
- 2) 秋山幹男・堂野佐俊 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知(その2) 出生順位との関係: 母親の場合 日本教育心理学会第24回総会発表論文集 80-81 1982

- 3) 秋山幹男・堂野佐俊 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知(その3)——父親と母親の比較—— 中国四国心理学会論文集 15 66 1982
- 4) 秋山幹男・堂野佐俊 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知(その5) 出生順位との関係:母親からみた三人きょうだいの場合 日本教育心理学会第25回総会発表論文集 224-225 1983
- 5) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(2)——4年間の縦断的研究—— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74 1980
- 6) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(3)——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72 1981
- 7) Arnold, M. Emotion and Personality 2nd ed. Columbia Univ. Press 1960 (宮本美沙子 感情の発達 藤永保・永野重史・依田明共編 児童心理学入門 196-213 新曜社 1977より)
- 8) 堂野佐俊・秋山幹男 幼児期における親の養育態度と子どもの性格認知(その4) 出生順位との関係:父親の場合 中国四国心理学会論文集 15 67 1982
- 9) Erikson, E. H. Childhood and Society 2nd ed. W. W. Norton & Company, Inc. 1963 (仁科弥生訳「幼児期と社会I」みすず書房 1977)
- 10) 平井信義 子どもの個性をどう伸ばすか 筑摩書房 1976
- 11) 亀石圭志・狩野素朗 養育態度研究に関する一考察——帰属理論による接近の試み—— 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門) 28 53-61 1983
- 12) 金平文二・鈴木裕子 母親の養育態度測定法の研究——カウンセリングのためのテストの標準化 東京家政大学研究紀要 21 29-36 1981
- 13) 河合隼雄 家族関係を考える 講談社 1980
- 14) 鯨岡峻 おとなから見た子ども(II) 島根大学教育学部紀要 人文・社会科学 15 107-131 1981
- 15) 三木安正・木村幸子 兄の性格と弟の性格——双生児研究その一—— 教育心理学研究 2 69-78 1954
- 16) 三輪弘道 親子関係と家族集団 柏木恵子・松田惺・宮本美沙子・久世敏雄・三輪弘道著 親子関係の心理 有斐閣 152-179 1978
- 17) 依田明・深津千賀子 出生順位と性格 教育心理学研究 11 47-54 1963
- 18) 依田明 家族関係の心理 有斐閣 1978
- 19) 横山正幸・秋山幹男・光安文夫・山口茂嘉 母親の育児観および養育態度と幼児の自主性の関係(I)・(II) 日本保育学会第33回大会研究論文集 380-383 1980

(幼児教育学科 助教授 秋山幹男)
 助教授 堂野佐俊)

—昭和59年10月5日 受理—

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

付表1 養育態度の質問項目

各質問の3つの答(はい、時々は、いいえ)の中で、上記のお子さんに対して一番よく当てはまると思われるところに○印をつけて下さい。お父さんは黒鉛筆で、お母さんは赤鉛筆で記入して下さい(ボールペンその他でも結構です)。

I

1. 子どもの食事や栄養についていつも心配していますか。
2. 外に出さず、なるべく家の中にいるようにさせていますか。
3. 子どもの相手をするのがとかく面倒くさい方ですか。
4. 親が良いと思うことは、子どもにどうしてもやらせがちですか。
5. 片方の親が子どもをひどく叱ると必ずもう一方の親は止めますか。

II

1. 子どもが一人でできることもつい手伝ってやりがちですか。
2. 子どもの年齢より赤ん坊じみた扱いをしていますか。
3. この子がいなければと思うようなことがありますか。
4. しつけについてはやかましく言い過ぎると思いますか。
5. あなた方両親のしつけ方が違っていませんか。

III

1. 子どもの身の回りのことを黙って見ていられないで干渉しがちですか。
2. 子どもがあなた方のすべてであると考えられますか。
3. 子どもの欠点ばかりが目についたり気になりますか。
4. 日課はきちんと決めてあって、それを厳守させるようにしていますか。
5. 家庭では片方の親の考え方が主となり、他方はこれに従っていますか。

IV

1. 子どものけんかや遊びに親が口を出しますか。
2. 子どもを叱らないでほめてばかりいますか。
3. 子どもの要求や約束に対して忘れたり、無関心だったりしますか。
4. 子どもの弁解やいい分を無視しますか。
5. 子どもの前で両親が言い争うことがありますか。

V

1. 幼稚園または保育所(園)のことをねほりはほり聞きますか。
2. 子どもの病気が直っても心配をしたり世話をやきますか。
3. 子どもが話しかけた時「忙しいからね」などと言って、話相手にならなかったりしますか。
4. 親の思いどおりにさせようとしますか。
5. 子どものことに関して、片方の親だけが責任を取りがちですか。

VI

1. 子ども一人では遠くに行かせないようにしていますか。
2. 何でも子ども本位に考えてやりますか。
3. いらいらすると子どもに当たり散らしますか。
4. よその子と比べて気にする方ですか。
5. あなたはその時の気分によって、しつけ方が変わりますか。

VII

1. 手の汚れや衣服の清潔など衛生についてやかましく注意しますか。
2. しつこくねだられると、最後には親の方が負けてしまいますか。
3. よく子どもを叱りますか。
4. 良い本、よい玩具など出来るだけ良いものばかり与えようと苦心しますか。
5. 子どもは同じことをしているのに、ある時は叱りある時はみのがしたりしますか。

VIII

1. 子どもが病気になったり、けがをすると非常に心配でろうばいしてしまいますか。
2. 決めてあることでも子どもがいやがればやらなくても許してやりますか。
3. 子どもを叱る時、たたくとか、つねるとかというような体罰を用いますか。
4. 子どもの将来について計画を立て、なんとかして目標に到達させたいですか。
5. あなたはいつも世話をやいたり、手伝ってあげるのに、子ども一人できないと怒りますか。

IX

1. 子どもが危険な遊びをしているのではないかと気になりますか。
2. 子どもの欲しがるものは無理をしても買ってやりますか。
3. 他の兄弟（姉妹）に比べてこのお子さんを特に叱ったり注意したりしますか。
4. 子どもはもっとやればできるのに努力していないように思いますか。
5. 口では「ほか」とか「だめ」とか言いながら内心では期待していますか。

X

1. かぜをひかないようにと注意したり、厚着をさせがちですか。
2. 子どもの機嫌をとったり、ちやほやしたりしますか。
3. 子どもと一緒に外出したり遊んだりしますか。
4. 子どもをおけいこごとに行かせていますか。
5. 日頃放っておきながら子どもがいやがるほど世話をやくことがありますか。

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

付表2 (調査全体): 差異項目と出現率

(単位 出現%)

項目	母 親				父 親			
	男 児		女 児		男 児		女 児	
	は い	いいえ	は い	いいえ	は い	いいえ	は い	いいえ
のびのびした	69.6		62.9		70.3		63.0	
幼 ない	33.9	49.1	26.6	57.7	34.1		28.2	46.6
意志が強い	44.1		55.7		47.2		57.2	
ふざけた	41.0	34.6	30.8	44.8	42.3	32.3	33.3	39.7
集中力がある	40.7	32.8	49.6	22.3		31.0		24.6
注意力のある	39.3	27.1	48.3	20.7	40.0		48.3	
確 実 な	36.7		47.0		34.7		42.4	
落ち着いた	35.5	37.5	46.9	26.0	33.6	37.8	42.4	28.8
自主的な	32.6		39.9			27.1		21.3
完成された		64.9		54.6		63.1		54.5
いじの悪い		82.1		71.6		73.1		
傷つきやすい	53.0	27.3			43.2	33.0		24.4
乱 暴 な		68.3		77.9				71.0
おどおどした		72.4		69.7		65.9		60.5
しっかりした	45.9		60.3		46.5		61.4	
はっきりしている	51.5	27.5	57.9	20.7				
依頼心が強い	42.6	32.5	34.7	41.7				
器 用 な	39.4	33.9	52.8	26.6		26.6		
おっとりしている	40.2	34.9						
たくましい	33.3		26.2					
リーダー的		52.7			19.4	45.6	28.4	
無邪気な			64.2				57.9	
好かれる					73.6		67.0	
表情が豊かな					72.3		66.5	
涙もろい					66.2		59.9	
創造的な					49.8		43.5	

付表3-1 きょうだい数(男児)：差異項目と出現率 (単位 出現%)

項目	母						親					
	一人っ子		二人きょうだい		三人きょうだい		一人っ子		二人きょうだい		三人きょうだい	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
積極的な	19.2	56.4	35.8	37.7	33.5	38.5	18.4	55.3	39.3	32.3	34.8	31.8
自己中心的な	44.9	33.3	32.6	46.1	26.7	51.6	47.4	31.6	33.5	44.5	25.0	54.5
おとなしい	51.3	38.5	32.3	56.6			48.7	36.8	32.6	50.9		
活発な	42.3	34.6	58.5	23.7			40.8	35.5	55.2	21.0		
とろい	50.0		36.1		33.5		51.3		33.5		30.3	
おっとりしている	51.3	33.3	37.5	48.8				32.9		47.0		
目立たない	43.6	33.3		47.7	27.3					48.2		37.1
意欲的な	35.9				50.9		26.3	31.6	43.9	20.1	47.0	15.2
恥ずかしがり	75.6	14.1	62.8	25.9								
好かれる	60.3		67.9		82.6							
自信のある		38.5		25.3								
たくましい	47.4				32.3							
リーダー的		62.8				47.8						
落ち着いた			32.9		43.5							
がさつな			25.3		15.5							
集中力がある							26.3	44.7	40.5	32.0	48.5	20.5
乱暴な								78.9		62.5		
意志が強い								28.9				16.7

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

付表 3-2 きょうだいい数〔女兒〕：差異項目と出現率 (単位 出現%)

項目	母						親					
	一人っ子		二人きょうだい		三人きょうだい		一人っ子		二人きょうだい		三人きょうだい	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
要領がいい	13.6	65.2	31.2	51.0	33.6	43.8	59.6	48.1	63.7	42.0		
しつかりした	43.9	33.1	64.0	13.1	16.8							
しまりのない		63.6		75.8	65.0				69.6			
落ち着いた	39.4		44.3		55.5					19.6		
目だたない	45.5		29.3						30.0			
たくましい		54.5		40.4						34.8		
思いやりのある	90.9				73.7	16.8			75.9			
集中力がある		28.8			62.0			34.6		73.2		
表情が豊かな			75.8		56.2				68.5			
無邪気な			66.9		67.3				60.7			
意志が強い	37.9	42.4	55.7	21.7	61.3	18.2						
意欲的な	34.8	30.3	51.3	16.9	57.7	16.1						
積極的な	22.7	48.5	39.2	32.8								
自主的な	24.2	37.9	46.5	21.0	33.6							
はつきりしている	47.0	30.3	60.8	18.5								
恥ずかしがり	77.3	13.6	66.6		54.0	31.4						
傷つきやすい	63.6		56.4		40.1							
幼ない		48.5		62.7								
おとなしい		36.4		51.9								
リーダー的		59.1		44.9								
涙もろい			67.5		54.7							
とろい		31.8				47.4						
いじの悪い							82.7		43.7	68.1		65.2
器用な							61.5					
頼もしい							30.8					50.9
依頼心が強い												25.0
自意識過剰な							9.6					25.2

付表4-1 出生順位〔男児〕：差異項目と出現率

項目	母				親					
	二人きょうだい				三人きょうだい					
	第一子		第二子		長子		中間子		末っ子	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
はっきりしている	46.8	32.1	60.8	20.4	22.6		51.5		56.5	
おどおどした		68.4		79.6		45.2		82.4		75.8
傷つきやすい	67.9	16.3	37.6	36.5		9.7				33.9
要領がいい	15.3	70.5	51.4	33.1						
たくましい	24.2	45.8	42.0	29.8	16.1		36.8		43.5	
活発な	51.1	31.1	66.3	16.0						
ふざけた	38.9	40.5	48.6	26.0						
おとなしい	41.6	50.0	22.7	63.5						
のびのびした	58.4		78.5		80.6		58.8		82.3	
おっとりしている	49.5	40.5	24.9	57.5				32.4		53.2
積極的な	26.8	47.4	45.3	27.6	22.6		26.5		46.8	
とろい	49.5	34.7	22.1	59.7						
リーダー的		58.4		47.0						
涙もろい	78.9	12.1	54.7	32.6						
意志が強い	33.2	37.4	55.2	18.2						
表情が豊かな	65.3		77.9							
無邪気な	57.4		74.6							
甘える	66.8		84.0							
集中力がある		41.6		28.2						
マイペース					45.2		73.5		43.5	
目だたない						25.8	42.6		25.8	48.4
器用な					58.1		33.8			
依頼心が強い							27.9	39.7	51.6	22.6
自己中心的な							19.1		37.1	
落ち着いた	27.9	43.2	38.1	32.0						
幼ない	31.6	55.3	41.4	41.4						
頼もしい	36.8		49.2							
自信のある	24.2		37.0							
完成された						45.2		66.2		
がきつな					29.0		7.4			
自己主張をする							54.4		71.0	
乱暴な										
しまりのない										
意欲的な										
注意力のある										

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

(単位 出現%)

父				親					
二人きょうだい				三人きょうだい					
第一子		第二子		長子		中間子		末っ子	
はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
47.4	26.6	65.8	14.2	40.7		45.6		68.8	
	56.6		78.7		48.1				72.9
55.5	21.4	27.7	44.5						
18.5	63.6	47.7	38.7						
28.9	42.2	45.2	26.5						
46.8	28.3	64.5	12.9			35.1		62.5	
36.4	39.3	53.5	23.9						
38.7	43.9	25.8	58.7						
63.0		77.4							
45.1	39.9	28.4	54.8						
30.6		49.0				22.8		52.1	
44.5	41.0	21.3	63.2						
17.9	48.6	27.7	36.1						
75.1	10.4	56.1	26.5						
34.7	34.1	57.4	16.1						
66.5		81.3		59.3				81.3	
50.3		67.7							
65.9		78.7							
35.3		46.5							
						71.9		52.1	
							28.1		52.1
				59.3		35.1		56.3	
						24.6	47.4	47.9	20.8
						15.8	64.9	35.4	43.8
15.6	68.2	25.2	56.1						
	58.4		69.7						
						36.8		60.4	
						29.8		56.3	

付表4-2 出生順位〔女児〕：差異項目と出現率

項目	母				親					
	二人きょうだい				三人きょうだい					
	第一子		第二子		長子		中間子		末っ子	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
傷つきやすい	70.6	13.3	44.4	30.4	52.9	17.6	50.0	25.0	21.6	47.1
自主的な	37.8	28.0	53.8	15.2		38.2				13.7
とろい	59.4	29.4	19.9	58.5	47.1		46.2	36.5	21.6	60.8
おっとりしている	46.2	30.8	22.2	62.0	50.0		40.4		15.7	
要領がいい	12.6	68.5	46.8	36.3		61.8		36.5		
涙もろい	77.6	11.2	59.1	30.4	79.4		46.2		47.1	
意志が強い	42.7	33.6	66.7	11.7	52.9	32.4	75.0	13.5	52.9	13.7
たくましい	16.8	48.3	32.7	33.9						
積極的な	26.6	42.7	49.7	24.6						
依頼心が強い	45.5	34.3	24.6	48.0						
はっきりしている	54.5		66.1			35.3				13.7
おとなしい	39.2	44.1	27.5	58.5						
自己主張をする	55.9		70.2		41.2	38.2	69.2	15.4		
リーダー的	18.9		29.8							
のびのびした	54.5		73.1							
ふざけた	24.5		38.6			67.6		44.2		
独創的な		31.5		19.2			38.5		19.6	
確実な	45.5		62.0				63.5		43.1	
甘える	65.7		82.5			29.4		9.6		
意欲的な	43.4		57.9							
表情が豊かな	69.2		81.3							
活発な						41.2				19.6
頼もしい					35.3		57.7			
無邪気な						32.4				11.8
マイペース	51.7		64.9				63.5		37.3	
集中力がある		30.1		17.0		32.4		9.6		13.7
好かれる	62.9		74.3							
自意識過剰な	15.4		28.1							
器用な					70.6				37.3	
創造的な						29.4				11.8
素直な										
注意力のある										
忘れやすい										
いじの悪い										
自信のある										
完成された										

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

(単位 出現%)

父				親					
二人きょうだい				三人きょうだい					
第一子		第二子		長子		中間子		末っ子	
はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
67.4	14.0	39.0	34.0	57.1	17.9			33.3	40.5
35.7	25.6	51.1	12.1		32.1	28.6	31.0	52.4	9.5
50.4	31.0	23.4	59.6			45.2	38.1	21.4	64.3
44.2	31.8	25.5	53.9	53.6				23.8	
18.6	61.2	41.1	42.6		60.7		35.7		
72.1	9.3	48.9	26.2						
47.3	28.7	67.4	11.3						
20.9	46.5	39.7	24.1				52.4		26.2
28.7	35.7	45.4	23.4			16.7		45.2	
43.4		29.1							
55.8		69.5							
38.0		26.2							
55.0		68.8							
17.8	51.2	40.4	32.6						
58.9		70.9							
				17.9	64.3	45.2	23.8		50.0
	27.1		17.0						
								33.3	11.9
						59.5		81.0	
								28.6	9.5
				42.9				71.4	
49.6		63.1			39.3				14.3
32.6		48.9				38.1		64.3	
				28.6				64.3	
73.6		61.7						26.2	9.5
				67.9		38.1	33.3		7.1
					75.0	26.2	47.6	4.8	76.2
				3.6				28.6	
					32.1				11.9
								40.5	64.3

付表5-1 性別構成〔男児〕：差異項目と出現率

項目	母				親			
	第一子				第二子			
	M - M		M - F		M - M		F - M	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
要領がいい	17.1	63.1	12.7	81.0	57.5	25.7	41.2	45.6
傷つきやすい	66.7	18.9	69.6	12.7	34.5	38.1	42.6	33.8
とろい	51.4	31.5	46.8		19.5	63.7	26.5	
無邪気な	58.6		55.7	25.3	73.5		76.5	5.9
涙もろい	81.1	8.1			48.7	39.8	64.7	20.6
意志が強い	36.9	37.8			61.9	11.5	44.1	29.4
はっきりしている	46.8	30.6			68.1	14.2	48.5	30.9
積極的な	28.8	48.6			51.3	22.1	35.3	36.8
ふざけた	36.9	42.3			54.0	18.6	39.7	38.2
たくましい	27.0		20.3	50.6	45.1		36.8	29.4
活発な	53.2	29.7			69.9	10.6		25.0
リーダー的	13.5	55.0			25.7	41.6		
おっとりしている	53.2	36.0			20.4	61.9		
器用な	47.7	30.6	30.4	46.8	33.6			
頼もしい	36.0	27.0			58.4	11.5	33.8	25.0
自己主張をする		14.4		27.8	75.2		55.9	
自主的な		32.4				16.8		29.4
表情が豊かな	63.1				81.4			
おどおどした		64.9				82.3		
思いやりのある	87.4				74.3			
のびのびした	55.9				80.5			
型にはまった		63.1				76.1		
自信のある	26.1	29.7			40.7	17.7		
おとなしい	39.6	52.3			18.6	64.6		
甘える	65.8				85.0			
集中力がある		43.2				27.4		
目だたない		40.5				55.8		
マイペース	55.9				69.0	14.2	52.9	26.5
しっかりした		18.0		34.2				
忘れやすい	29.7				11.5			
幼ない			25.3	60.8			41.2	35.3
落ち着いた			25.3	49.4			41.2	32.4
好かれる					76.1		60.3	
乱暴な								
依頼心が強い								
しまりのない								

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (i) (秋山・堂野)

(単位 出現%)

父				親			
第一子				第二子			
M - M		M - F		M - M		F - M	
はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
23.7	59.8	11.8	68.4	52.0	31.6	40.4	50.9
60.8	20.6	48.7		25.5	49.0	31.6	
45.4	42.3	43.4	39.5	20.4	65.3	22.8	59.6
54.6		44.7		68.4		66.7	
79.4	5.2			52.0	32.7		15.8
37.1	30.9			68.4	10.2	38.6	26.3
46.4	27.8			73.5	9.2	52.6	
32.0	37.1			54.1	22.4		38.6
37.1	38.1			59.2	18.4		33.3
32.0	39.2			49.0	23.5		
49.5	26.8			73.5	8.2	49.1	
18.6	43.3			35.7	26.5	14.0	52.6
47.4	38.1			23.5	60.2		
53.6		38.2					
37.1				52.0			
				75.5		59.6	
32.0	32.0			52.0	17.3	28.1	33.3
68.0				87.8		70.2	
	55.7					81.6	
81.4				64.3		82.5	
61.9				82.7		68.4	
	56.7					75.5	
				45.9		28.1	
	44.3					63.3	
		67.1				84.2	
30.9				49.0			
			52.6		53.1		33.3
15.5	70.1			28.6	51.0		
	39.2		21.1				
	54.6				72.4		

付表5-2 性別構成〔女兒〕：差異項目と出現率

項目	母				親			
	第一子				第二子			
	Ⓕ - F		Ⓕ - M		F - Ⓕ		M - Ⓕ	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
意志が強い	34.3	41.8	50.0	26.3	62.4	14.0	71.8	9.0
傷つきやすい	74.6	9.0	67.1	17.1	40.9	29.0	48.7	32.1
おっとりしている	62.7	29.9	31.6	31.6	21.5	61.3		62.8
積極的な	22.4	44.8	30.3	40.8	44.1	29.0	56.4	19.2
要領がいい	13.4	68.7	11.8	68.4	49.5	29.0	43.6	44.9
とろい	68.7	19.4	51.3	38.2	18.3	54.8	21.8	62.8
涙もろい	77.6	11.9	77.6	10.5	62.4	25.8	55.1	35.9
おとなしい	47.8	40.3	31.6		26.9	64.5		
自主的な			34.2	27.6	45.2		64.1	10.3
たくましい	17.9	50.7			36.6	26.9		
乱暴な		85.1				64.5		88.5
恥ずかしがり	76.1		57.9					
素直な	79.1				62.4			
好かれる			59.2				80.8	
のびのびした			56.6				79.5	
依頼心が強い	49.3	28.4	42.1		28.0	44.1	20.5	
甘える	71.6		60.5		86.0		78.2	
幼ない		77.6		60.5		58.1		
表情が豊かな	64.2				80.6			
自己主張をする	49.3				65.6			
マイペース			47.4				64.1	
集中力がある		31.3				12.9		
自信のある		31.3				16.1		
意欲的な		29.9				11.8		
自意識過剰な			15.8				34.6	
リーダー的								
頼もしい								
目だたない								
やさしい								
いじの悪い								
おどおどした								
はっきりした								
しっかりした								

両親の幼児に対する養育態度と性格認知について (1) (秋山・堂野)

(単位 出現%)

父				親			
第一子				第二子			
Ⓕ - F		Ⓕ - M		F - Ⓕ		M - Ⓕ	
はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
35.5	37.1	58.2	20.9	58.4	15.6	78.1	
79.0	11.3	56.7	16.4	40.3	33.8	37.5	34.4
56.5	27.4	32.8	35.8	27.3	51.9		56.3
24.2	40.3	32.8		41.6	23.4	50.0	
16.1	66.1	20.9		41.6	40.3	40.6	
58.1	24.2	43.3	37.3	28.6	55.8	17.2	64.1
71.0	9.7	73.1	9.0	50.6	26.0	46.9	26.6
43.5	38.7			23.4	55.8		
	29.0	40.3		41.6	13.0	62.5	
14.5	53.2			40.3	20.8		
	80.6				53.2		81.3
79.0		56.7	20.9	72.7	16.9	50.0	37.5
87.1		61.2		55.8			
		55.2				79.7	
		59.7				76.6	
14.5	58.1	20.9		40.3	31.2	40.6	
27.4	30.6			51.9	13.0		
			40.3	37.7		20.3	60.9
90.3				70.1			
	80.6				62.3		
27.4				13.0			
		53.7				75.0	
		56.7				73.4	